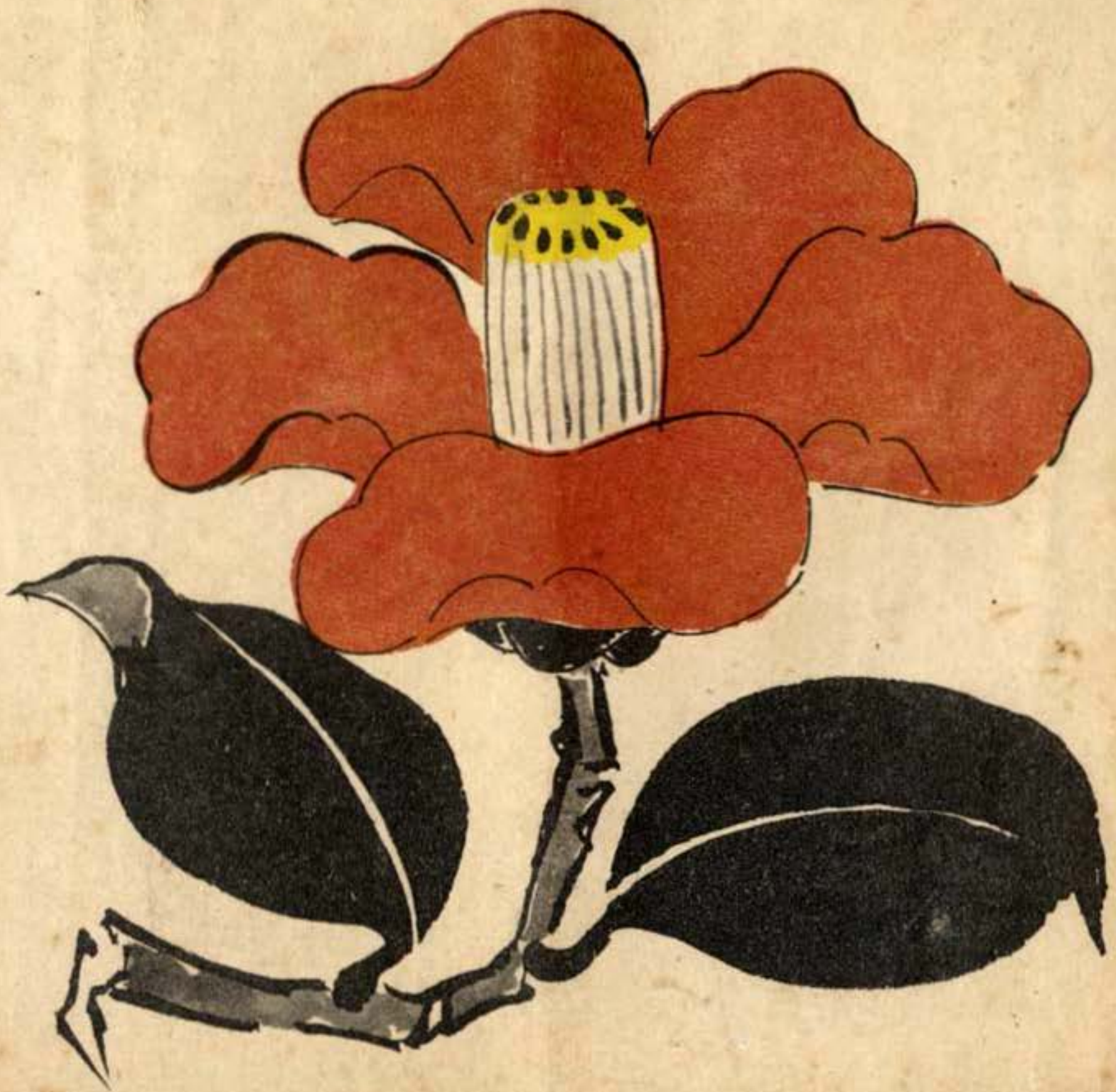


土 淨

號 月 二

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年一月廿日印刷納本・昭和十七年二月一日發行

第八卷 第二號



陸海軍 慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御參加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◇一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◇御送金は浄土宗務所事務部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村 辨 康 著

日常勤行式講讀

B 6 版二百四十頁
價一圓五十錢
送料十錢

新 刊

！ 來 出 よ い よ い 書 の 望 待
侶 伴 好 養 修 の 携 必 徒 宗 土 淨

◇本誌に連載し、好評を博した信仰の入門書！◇
◇座右に備へて日常勤行の深意を味得せられよ！◇

淨土宗でいつもお勤めしてゐるお經文に一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯をあげ、それに字解までつけて誰にでも解るやうにして、更に著者の燃ゆる信念から湧き出た解説がついてゐます。従つて單なる解説ではなくて誰にも喜ばれる信仰の入門書です。會員各位の修養に、僧侶各位の參考資料と説教その他の教材に最適です。

發行所 法 然 上 人 鑽 仰 會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番



浄土二月號 目次

表紙・扉・目次カット……………河村 良孝

二顆の柚子の實……………吉田絃二郎(二〇)

諸君と共に斯く進まん……………宇垣一成(六)

多田院開帳……………上司小劍(三)

隨想二題
法然主義と申し上げ度きこと……………北條春光(三)
法然上人の御名號軸……………望月信成(二四)

法語 感話
當りまへが有難い……………伊藤宏天(二四)

大東亞戦争と綴方教室

僕たちのかくご……………愛日國民學校兒童(三四)



信

仰

相

談

中村 辨康 (四)

念佛と大島商船學校……………藤本 淨本 (二六)

實弟五十六大將を語る……………高橋 嘉壽 (二〇)

歌

壇

與謝野 晶子選 (二三)

俳

壇

太田 耳動子選 (一九)

浄土漫畫 戦ひ拔かう大東亞戦……………漫畫 協團 (四)

小説 客

一瀬 直行 (四〇)

家庭講座 時局と佛教……………伊藤 智源 (五)

會のたより……………(五二)
編輯後記……………(五七)

浄土二月號 目次

廣島文理科大学教授
文學博士

山本 幹夫 著

新刊 法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛

教を歴史的に解明す。時局下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つて初めて萬民翼賛の教法として現れ大成されるまでを總ゆる資料により解明されてゐる。

先づ日本佛教と日本國體とを中心にして、神國日本の教法として佛教が展開し來つた史的實相を示す本書こそ、淨土教徒のみならず廣く萬人の知らんとするところである。わが國ならではと思はしめる新宗の開創の根據を説いて餘りなし

わが國體思想からみた

法然佛教の新しい基礎づけ

A5型クローズ装箱入
價 二圓二十錢
送料 十錢
會員に限り
送料當方負擔

目次

序論

- 一、法然佛教の前提
- 二、法然佛教の機構

本論

第一編 日本と日本佛教

- 三、神の國と人の國
- 四、神道と佛法
- 五、天照大御神
- 六、祭政・教一如
- 七、國體と國民道德と教學
- 八、肉身的と法身的

第二編 日本佛教の展開

- 九、佛教の公傳以前
- 一〇、佛教公傳紀とその背景
- 一一、日本佛教の發足
- 一二、十七條憲法
日本佛教の原理
- 一三、國家佛教
- 一四、國家佛教の内外
- 一五、平安佛教の歸結

第三篇

- 一六、法然佛教序觀
- 一七、新宗開創
- 一八、法然上人の宗教體系
- 一九、選擇本願念佛
- 二〇、平等の慈悲
- 二一、萬民翼賛の教法

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京芝區芝公園照明會館
東京芝區芝公園照明會館
番七 八 一 二 八

淨土

もし智慧ちゐをもて生死しじを離はなるべくば
源空げんくうなんぞ聖道門しやうだうもんをすてゝ、この
淨土門じやうどもんにおもむくべき。まさに知し
るべし、聖道しやうだうの修行しやうぎやうは、智慧ちゐをき
はめて生死しじをはなれ、淨土門じやうどもんの修
行しやうぎやうは、愚痴ぐちにかへりて、極樂ごくらくにむ
まると。

法然上人御法語



二月號



諸君と共に斯く進まん

陸軍大將 宇垣一成

全國民總進軍の時は來た。東亞から「アングロサクソン」の壓迫を掃蕩する機會が到來した。わが帝國の國策たる支那事變の完遂と東亞の安定確保の聖業は、米英兩國を主軸とする反日敵性勢力を、東亞の全域から驅逐し一掃するに非ざれば、到底その達成を望み得ざる局面に逢着したのである。

平和の維持を不斷に熱望する日本の努力は、遂に水泡に歸し、茲に決然且奮然と起つの日が到來したのである。畏くも宣戰の御詔勅を拜し、吾々は肅然襟を正し、大御心を體して全國民一丸となり、有形、無形の總力をあげて、勝利に向つてこの聖戰を勇ましく戦ひ抜かねばならないのである。

宣戰とともに、忠勇なる皇軍の將士は、廣大なる太平洋

及南洋の全戰線に亘つて、赫々たる戰果をあげ、敵の心膽を寒からしめ全世界を驚歎せしめて居る。この輝かしき緒戰、序幕の大勝利は、まことに痛快の極みであり又皇軍將士に對して感謝に堪へぬ。吾々は滿身の血を沸かせ、戦線銃後悉く熱鐵一丸となり、決死報國の大義に殉じ、以て聖旨に副ひ奉るとともに、光輝ある二千有六百年の歴史、將又祖先の靈前に恥ぢざるやう、眞に皇國の民としてこの未曾有なる天の一大試鍊に堂々と打ち克たねばならないのである。

實に今次の聖戰は東亞民族の解放戰であり、又新東亞、尙進んでは世界新秩序の建設戰である、使命は壯大であり目的は宏遠である。東條首相は『……當面の敵は物質の豊富を誇り、これに依て世界の制覇を目指して居るのであり

ます。この敵を粉碎し、東亞不動の新秩序を建設せむが爲には、當然長期戦たることを豫想せねばなりませぬ。：—

と述べてゐるが、吾々は常に宏壯なる使命と目的に思を致して徒らに緒戦の勝利に酔ひ、浮薄な氣持に驅られて有頂天になつてはならぬのである。戦ひがいかに長期に及び困苦を伴ふとも、斷じて屈せず撓まざる強靱な心構を必要とする。

然らば、長期戦と

はいかなる筋合のもの

のであるか？ 凡そ

戦争が長期に及ぶ場

合は、結局兩交戦國の國力の總和が平衡を得た時に、常に

起ると觀すべきである。

従つて、この長期戦を決戦に導くためには、當然國力の

總和の平衡を破らなければならぬ。當面の戦線に於いて、



兵力の絶對的優位は必須の要件であるが、これに伴つて外交、經濟、思想等あらゆる部門に亘つて、不敗の構へをたて、將又進んで敵國の夫等を破壊しなければ、到底國力總

和の平衡を打ち破るとは出来ないものである。ここに長期戦の特質が存する。

即ち吾々は相手方の精神力や經濟力や外交工作を打ち破るとともに、自國のそれを擁護し、増強する必要がある。長期戦を決戦に導いて最後の勝利を確保するためには、いかなる事があつてもこれをする事が必要である。國家總力をあげ

爲し遂げる事が絶對必須、不可缺である。國家總力をあげての長期戦を戦ひ抜くためには、全國民のこの牢固たる心構と身構が第一に要請されるのである。

故に、全國民は當局の施策に順應して、前途に明るい希

望を懷持しつゝ、上述の心身の構へを以て勝利への途を歩武堂々と進むべきである。逡巡してはならぬ、躊躇してはならぬ。

かくの如く長期戦には、剛健にして不屈、而かも何ものにも怯せざる強靱な意志、旺盛なる精神力の凝集が第一義とされてゐるのであるが、これは換言すれば、戦線に於いては勇猛果敢、不惜身命の奮闘となり、銃後にあつては堅忍不拔忘私奉公の活動となるのである。

戦ひは、まさにこれからである。緒戦の快勝に、吾々は勇氣を奮ひ起し、あくまでがつちりと腰を据ゑ、最後に至るまで不動の信念を以て、戦ひ抜くの覺悟を定めなければならぬ。勝つて兎の緒を締めよとは、此の場合に當嵌る言葉である。

太平洋及南洋に烽火揚がると共に、吾々は支那國民は言ふに及ばず、佛印、タイ、或は蘭印、緬甸、印度等との接觸が愈々擴大し且緊密となつて来る。茲に於いて日本人たるもの、徒らに輕佻、驕慢、獨善であつてはならぬ。あくまで重厚にして悠揚自若、多くの東亞民族を包容して、彼らの先輩、指導者としての立場に恥かしからぬ心掛けと夫にふさはしき言動に出づべきである。かくしてこそ、其處

に彼らの信頼、心服を得て遠大なる企圖を達成することが出來得るのである。

心服、信頼のないところに、恒久の平和も融和も成り立たず、共榮圈の確立もあり得ない。日本人は指導者としての、名實ともに恥しからぬ資質を、自ら顧みて養はなければならぬ。戦ひが長くなれば、益々彼らの信頼心服の度を増す如く、努める必要が大にある。

この心構身構を、この際特に明確に把握して、一意精進すべきである。

繰り返す様であるが、戦争には相手がある。こちらが如何に事態を簡單にアツサリと切りあげようとしても、相手が、長期戦の構へを備へて執拗に掛つて來れば、吾々としては退くことは出來ない。謂はば究極は國家、國民の根氣競べとなるのである。

従つて、英米とも今後防守に、反撃に愈々全力を傾倒して來ることを豫想せねばならぬ。大勢既に非なりとは言ひ乍ら、何處にも相手方は相當根底深き國力を有し又東亞に張り廻した地盤は、極めて廣範圍であり、尙相當に根強いものがあると考ふべきである。従つて、吾々は相手方を甘く見縊つてはならない。恐れる要は毛頭ないが、さりとて

輕視しては不覺をとる恐れなきにしも非ずと考へなければならぬ。いつの場合にも油斷は大敵である。

將に大いなる決勝の時が來てゐるのである。慌ててはならぬ。狼狽してはならぬ。悲鳴をあげては尙更ならぬのである。あくまで、石に嚙りついても勝利の榮冠を獲るために、一切の障礙と苦難を克服するの鐵石の決意をなす機が現に來てゐるのである。一層の自肅緊張を切に望んでやまない。

石に嚙りついても……の決意と覺悟を、この際、この時すべての國民がかためなければならぬ。就中青年諸子の猛然と奮起しての殉國的の奉公を切望して止みませぬ！

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名

(敬稱略)

五圓

静岡縣富士郡原田村

清 岩 寺

一圓二十錢

青森縣東津輕郡平館村

福 昌 庵

一圓二十錢

同

丸尾傳山

一圓五十錢

青森市

一念庵

二圓二十錢

名古屋市中區千早町三ノ二

三 木 榮

一圓二十錢

青森縣南津輕郡五郷村大字北中野

小倉フサ

淨土宗獨特の詠讚節

「淨土宗御詠歌」

無料
贈呈

經本仕立(縦七寸 横三寸五分) 六十頁美本

内 容……

◇法然上人二十五靈場◇靜寛院宮御詠歌◇西國三十三番
◇勢至丸和讃◇詠讚歌音譜及び略譜付

増上寺御詠歌講に新入會員として入會金一圓也をお納めの方に「淨土宗御詠歌」全一冊を無代にて贈呈します。一度入會すれば後は會費不要で毎月二、十四、二十五日の三日増上寺で御詠歌の稽古が受けられます。

住所氏名明記の上、入會金金一圓をそへてどなたも御申込下さい。地方會員を歓迎します。

申込所

増上寺晨朝會

東京市芝區芝公園二號地



二顆の柚子の實

吉田 絃二郎

人間といふものは満たされた生活をしてゐるあひ

だは、満たされたといふ幸福を感じてゐないことが多い。不運に陥つてはじめて以前の生活が満たされたものであつたことに氣付く。あさましいことであるがそれが人間であり、凡夫であらう。妻と二人きりで生きてゐた間は時として一人でも子供があつたらと思ふこともあつた。妻を失つてからは、妻の生きてゐた日の満たされた生活をしみじみと感ずるやうになつた。

たゞ獨り生きてゆくやうになつてからは、何も彼も不自由であると思ふやうになつた。しかし病氣にかゝつて見ると、たとひ獨りの生活でも健康な間は満たされた生活であることをしみじみと感じないで

はをれない。

わたくしはたゞ獨りで病んでゐる。しかしわたくしの家にはわたくしのために炊爨の勞を惜しまぬ召し使ひの女がある。

わたしは病氣にかゝるごとに、かつて嵯峨の奥にめぐり會つた一人の男のことを思ふ。かれはわたくしよりも老いてゐた。しかもかれはたゞ獨りで庵を守り、四十度の高熱にも水をもとめて、水甕まで這つてゆかなければならなかつた。かれはそのやうな折「まだ業が滅しないからだ」と自分自身に言ひ聞かせた。

わたくしは幸福である。わたくしにはまだわたくしのために藥の水を運んでくれる召し使ひの女たち



がある。

×

病院を訪ねた人々はそこに七年八年或は十餘年の長い間病と闘ひつゝある人に氣付くであらう。

青い空の下に、太陽の光りを浴びつゝありといふことだけのためにも、わたくしたちは幸福を感謝しなければならぬ。

病身である人もかれが視力をあたへられ耳をめぐまれてあることを感謝しなければならぬ。しかし盲ひたる人も亦かれがなほ物を聴くのはたらきをめぐまれてゐることを感謝しなければならぬ。

無論世の中には大聖孔子をして「此の人にして此の病あるか」と歎ぜしめたほどの氣の毒な病もある。わたくしたちはそれ等の氣の毒な人々に對して容易に慰めの言葉を見出すこともできない。わたくしたちはたゞさういふ不幸な人々のために心からなる思ひやりをつくすのみである。

×

今夜は静かな雨が降りはじめた。恐らく雪になるのであらう。寢床の上に坐つて字を書いてゐると手

がこゞえるやうに寒い。

子供のころわたくしが病氣にかゝると母が心配して夜つびて寢もやらず枕頭に坐つてゐるので、子供心にも病氣にかゝるのが心苦しく、たいていな病氣は我慢をして母に隠すやうにしたが、直ぐに見あらはされて、母に苦しい思ひをさせたことを思ひ出す。

大雪のころであつた。わたくしは四十度ちかくの高熱に苦しんでゐた。妻もまた三十八九度の熱に苦しんでゐた。召し使ひとでもない家のことだつたので、妻は自分の病苦を忍んで臺所に行つては氷嚢を取りかへたりして、夜つびて起きてゐてくれた。

わたくしは病むごとに亡き母を思ひ亡き妻を憶ふ。わたくしは幸福であつた。

×

雨の音は板庇を打つ。静かな音だ。

その静かな音の一つ一つが心の底深く徹してゆく或るものを感じさせる。

わたくしはその心の底に徹しゆくものの姿をじつと凝視めようとする。遠いまだ生まれなかつた以前のわたくし自身の宿命、そしてそれは人類すべての



宿命が静かな足どりであたくしの前を歩いてゆく。

同時に現實を擺脫した存在の、死の世界のわたくし自身、人類すべての宿命が静かな歩みを運んで遠ざかつてゆく。

静かな雨の音だ。夜も更けたらしい。雪になつたのであらう。時たま板庇を打つ涓滴の音の他には寂然として何の聲とでもない。

わたくしはたゞ獨り小ひさな炭火を見守りつゝ窓の外の聲なき聲に耳を傾ける。

やさしい母の聲がよみがへつて来る。亡くなつた父も妻もよみがへつて来る。

静かな雪の夜だ。しかしわたくしの心の世界に於いては思ひ出の花が薫り、楽しい笑ひ聲が反響する。雪の夜は静かだ。しかしわたくしは孤獨ではない。

×

毎年冬になれば二三百顆の黄色なかゞやかしさを見せてくれる柚子の實が今年にはわづか十顆ばかりを枝頭にとゞめたばかりであつた。

裏の竹山の外縁に、竹の葉を背景に光るほどのあざやかな色を見せてくれる柚子の實は冬枯れの裏庭

の魅惑でもある。

わたくしは倉の白い壁に對して黙々として冬の柔な日ざしを浴びてゐる柚子の實を樹上にながめては冬の孤獨を慰めるのであつた。

数日前、わたくしは不圖裏の竹山に落ちた二顆の柚子の實を發見した。そして拾つて來て書齋の黒檀の机の上に載せて置いた。

その夜からわたくしは病の床に就いた。今朝數日振り起きてはじめて書齋に入つた。

書齋の黒檀の机の上にはそのまゝに二顆の柚子の實が置かれてあつた。書齋中に芳ばしい香をさへただよはせつゝ。

二顆の柚子の實は雪の朝の寒さにこゞえながらわたくしを待つてゐた。

わたくしはそつと柚子の實を抱き上げて、火鉢の火にかざしてあたゝめてやつた。

孤獨な生活裡では二顆の柚子の實も無縁の存在ではない。

×

×

×

歌

壇

與謝野
晶子選

京都 谷口 慈童

東條首相の施政演説を聞きて

百年の興廢決す瞬間の迫るを感ず
病める我れにも

一億國民が等しく覺悟を定めてゐた大東亞戰爭開始前の緊張した氣持が病人である作者の胸にもひたひたと押し寄せまつて、それが首相の施政演説を聞くに及んで憂國の情を一層奔騰せしめられたのである。

秋田市 羽後 慎隨

國守る食糧積み上げて微笑みぬこの力腕尊くもあり

評 農人自身がよくこの時局を認識し、その責務を十分に自覺した心持を表現した作、今は收穫のよろこびも己れ一個のものではない。國家のためのよろこびだと云ふ、自負心が然り上つてゐる

滋賀縣 湊 靜

待ちわびし夫子の戦地の初便り白紙に入れし遺髪のみなり

評 良人を戦地に送つてからは明くれその安否が氣づかばれて元氣な便りを持ちわびて居りました。初の消息がもたらされたので嬉しく封を切ると、何事とせう。文書はなくて、髪を毛を切つたのが入つておました。良人は戦死の覺

悟をしてゐるのですと思はず襟を正して肅然とした妻の吐息の作。

東海軍病院 吉本喜代三

波高き太平洋のこの秋に白衣に包み思ひを知るや

東京 押野 尚秀

尊しやあな傷ましや輝ける戦果の蔭の兵の犠牲

京都 葉山 千高

坐して食はぬよろこびありぬ一日の業を終へつつゆ浴みする時

長野縣 丸山 力剛

故郷は秋祭なりこの宵を歩哨となりて沁沁おもふ

北支 渡邊 明道

伏しなびくみ桶ぞわれは事しあらば君のみにをどり立たなむ

東京 上野 昌子

みいくさに従ふ夫子が面影をうつす兒なくて心さびしき

新潟縣 北條 竹香

遠く征く兵士の上を偲ふ時物の不

足を思ふべきかは

栃木縣 大輪 清

山の町提灯さげて自轉車の夜霧の中を近づきにけり

京都 白峰 敏夫

散兵の劔光白き秋の野に影を落して蕪鳴き舞へる

愛媛縣 明 月

安んじて寝ねがたきかな秋の田の取入れ前に風の吹く夜は

小樽市 中村 茂舞

阿寒岳つらなる峰に冬雲の影おもむろにうつす湖

札幌市 札幌市人療養所北谷進八郎

札幌の宵の灯を見て菊咲ける庭に出で立ち母を思ふも

水戸陸軍病院 下山田宗太郎

温濕布換へ與へつつ馴れぬ手はいためる兵に冷たくふれけむ

兵庫縣 水谷 良子

草庵にこころむなく雨を聞く木ごと葉ごとに音の違ふと

東京 森田 法晃

たれこめし黒雲去りてひんがしの國にあらはるゆゆし鐵嶺

傷痍軍人北海道療養所木田政一

戦捷のニュースに病うち忘れ薬瓶を手に萬歳と呼ぶ

北海道 花田 順往

汝れゆかば老をいたわりおさなき

を慈しみつつ夫子に仕へよ

静岡縣 堀内 孝雄

見渡せば愛鷹山に伊豆の山雲に浮びてたゆたふことし

久留米市 江上 正一

わが友は言葉少なに笑ひ征く潔きよきかな玉と散るひと

東京 小泉 妙春

強かれと口と心に祈りつつ出でて征く子を母ははげます

朝鮮 三浦 砂千子

幸うすき人なりしかな黒暗の波間に深く沈みゆくはや(氣比丸)

廣島 上原 四人

秋祭過ぎつる後に童らはサイダア箱を御輿に遊ぶ

大分 河邊 善隆

秋の山兎狩るとて我等行き何も獲らずに歸りこしかな

横濱市 白石 廣祐

雪原の孤城モスコオ名のごとく赤く激しく燃えゐるならん

東京 三野 幸節

牧場はただ一面に草枯れて端山の上に白き富士浮く

投稿規定

はがきに一回二首以内と
あて住所氏名明記の上送
ること

法 語
感 話

當りまへが有難い

伊 藤 宏 天

神秘とか奇蹟とかが、宗教には當然のつきもの、のやうに考へられ、高僧傳などにもよく付説せられて、其れによつて信仰を勧めたり有難がらせたりするのが、世の一般の常のやうでもあるが、斯うした側から見ると、我が祖法然上人の傳記は、まことに貧弱であります。然し、遡つて釋尊傳を見ると、佛弟子の中で通力を示し、奇蹟を行つたために、釋尊から大層叱られたのがあり、其の叱られたことが因縁となり、更に大願を起して、嚴護法城の任に就いたとでも云ふのでせうか、各地で殊に參詣人の多いお堂の縁側に、金網に包まれながら坐つて居られる、お寺で遊ぶ

小供たちに縁の深い、あのお寶頭盧さんが其の人であるなど、興味の強い傳説があります。此の方から見ると、佛教には奇蹟の無いのがよいことになります。事實、吾人の所信を卒直に申し上げますと「正法に不思議なし、不思議無きを以て不思議となす」であります。不思議とか不可思議とか云ふ語は、佛典にザラに出て來るのですが、其れを、神秘奇蹟と考へるのはよくありません。神秘奇蹟が行き過ぎると、妖怪變化になりさうです。妖怪變化とまでなると、思慮ある人は判斷しますが、其れが心靈現象などとして奇妙なことに解説されると、ツイ一般人は引つかかり

易いものです。

天地大自然の現象を誰が奇妙と見ませう。

微妙とこそ讚美すれ、誰も奇妙とは申しません。而もこれ不思議であります。大不思議であります。植物が酸素を吐き出して動物が其れを吸ひ、動物が炭酸瓦斯を吐き出して植物が其れを吸ふ。事實を事實として認めるより他に、全く説明の方も無く餘地も無い。實に不思議であります。甚深微妙であります。目前に見る此のあたりまへの事實、今、現に、行ひつづけて居る此の事が、氣づかずして皆人のなせる呼吸、偕て、其うと氣づいて見たとて、何うやりかへる法も無い、たゞ、あたりまへにするだけのこと、其のあたりまへに出來るのが有難いと、よろこぶ心が佛教信仰のもとだと申し上げ度いのであります。

法然上人の御法語に「世に法爾の道理と云ふことあり、焰は空に上り水は下りさまに流る。果ものの中に甘きものあり酸きものあり云云」と申されて、誰もが信じ切つて疑はぬ世間の事實であることを示され、念佛申して

彌陀に救はるることを何も不思議とするには及ばぬでは無いか、とばかりのお心に拜察しますが、然し、不思議と云へば是れ大不思議甚深微妙、實に難解の法門であります。たゞあたりまへの事がら、有難いと仰いで信受するより外は御座るません。

又、他の御法語に「浄土の法門は、義無き

不眠や断食が偉いなら

石燈籠が一番偉い



を義とし、様無きを様とす」と云ふ意味のが御座るますが、私は先の「正法に不思議なし不思議なきを以て不思議となす」と、並べ用ひて「あたりまへが有難いのだ」と鼓吹して居ります。特別に有難い事を探さうとするから、要らぬ苦勞をするのです。信仰を求むれども得られず、御信心が頂けぬなどと、變な

ところへ力こぶを入れて居ては駄目です。求道の歷程に色々ありませうが、達して見れば「あた

りまへが有難い」のであります。

釋尊の求道の歷程に學んで見ませう。其の動機は様々に説きますが、要は人生の意義と價值とを求めたのです。王城の生活に居たたまらず、夜半ひそかに脱け出でて、勝者苦行の輩に伍して衣食眠を断つて勤苦修行しました。今、勝者と譯しましたが大英雄と呼び、者那と云ふのです。普通人の敢て爲し得ぬ難行をするから偉い（勝者）と云ふのです。者那の連中（教徒）は斯く信じて行じて居ます。世間並の者は食ひ度だけ食ひ、着たいだけ着、眠たいだけ眠て居る。其れでは生れて來た甲斐が無い。我等、道を求むるもの、宗教に志すものは、世間人の敢て爲し得ぬ事を爲すものである。先づ、食ひ度ひけれども食はぬ。食はぬ食はぬと頑張つて断食の行をする。同様に裸行をやり、樹下石上を座として不眠不臥の行をやる。其れをやり通すところが偉い、大英雄なりと云ふわけで續けて居る。此の人々の群に入つて勤苦六年とか十

二年とか云ひますから、相當長期間續けたらしいのです。故に瘦せて骨と皮ばかり、目は落ち込んで神経ばかりイラ／＼する。斯んな事をして居ては死んで仕舞ふ。死なないまでも、何にも世の中のお役に立たぬでは無いか。お役に立たぬものなら死んだも同様である。俺は本當に生きる道を求めて居るのだ

(人生の意義) : : 彼は考へ始めました。考へ續けました。考へ抜きました。偉いのです。

私は第一に釋尊の此の態度に感服します。やらずに考へて居たので無く、又、考へも無くやつて居たのではありません。考へることとやることと、研究と實行とです。後年、佛教では、菩提、涅槃と云ふ術語で示して居ますが、この研究と實行とは離してはいけません。です。

考へて、第一に彼が出會つた疑問は「食はぬのが何故偉いのかこれが何故に修行になるのか」無論、たらふく食つて、たらふく飲んで、腹の皮をつつばらして目の皮をたるまし

て、フラ／＼してゐる奴はロクで無しだけれど、食はぬのが偉いならお庭の石燈籠でもよい筈である。人間が石燈籠の眞似をして何になる。食はぬのが別段偉いのでは無い。食ふものは當り前に食つたらよいのだ。食べ度い放題食ふ上では無い。當り前に食ふとは正しく食ふことである。第二に私の釋尊に共鳴を禁じ得ないのは此の點であります。當り前とは出鱈目では無い。正しくと決着したところ正に大偉人であります。斯うして食の問題を解決した彼は、同じ調子で着ることも寝ることも片づけました。即ち、着ぬのが偉いのでは無い、寝ぬのが偉いのでは無い。當り前に着て當り前に寝ればよいのである。其れは正しく着て正しく寝ることである。人間の生活を起居寢食に分けるなら、正しく食つて正しく着て、正しく寝て正しく起きて、そして正しく働くことが、本當に生きる第一階梯であると氣がついたのであります。其の時に、道ばたを通る乙女のひな歌に耳をすますと、

絲が弱けりや弱くて鳴らぬ
とかく世の中ほどよい加減
と聞きました。確かにさうだ。悟りは一段と進みました。遂に彼は「當りまへに着、當りまへに食ひ、當りまへに寝、當りまへに起き」起居寢食を正しうして修行を續けました。菩提樹下に座禪をして考へたと申すのです。そして「當りまへが有難い」と悟つたのです。これが悟りの完成です。
如何に敬愛なる誌友諸賢、繰り返しここに提唱する「あたりまへが有難い」に、強い共鳴を感じて呉れませんか。念のために、一度、解説を試みませう。法然上人以前の念佛と法然上人の念佛との相違にも成るのです。何れ稿を改めて申すつもりですが、法然上人を自他宗共に「元祖さま」と敬ひ稱するので、云ふまでも無く「念佛の元祖さま」であります。然し、單に念佛の鼓吹者、修行者と云ふなら、法然上人以前に恵心僧都あり良忍上人あり空也上人あり、決して法然上人を以て最初(元祖)とするわけには参りませ

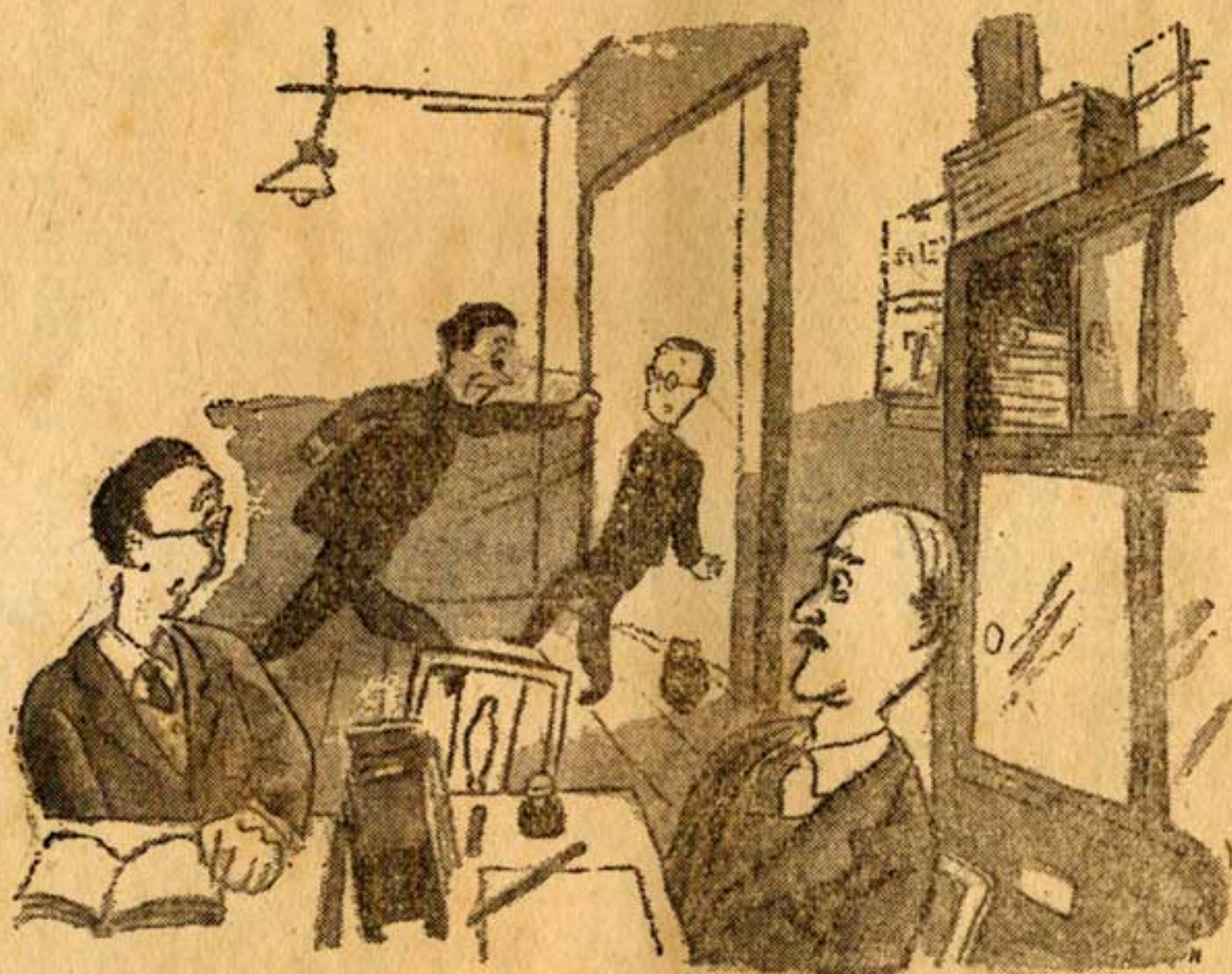
ぬ。然るに、自他共に「元祖さま」と申せるのは、つまり、特殊な念佛と當りまへの念佛とによるので、義なきを義とし、様なきを様とする念佛が、全く有難いことになるのであります。

他の例を擧げて見るに、三度三度頂く御飯は「あたりまへ」の御飯、時々稀に頂く鰻井は「あたらんまへの御飯」どちらが甘いかと聞かれたら鰻井と云ふかも知れぬ。其んなら毎日毎日三度三度召し上れと勧められたらウンザリする。毎日頂くあたりまへの御飯はいつまでたつても厭にはならぬ。これあたりまへが有難い證據です。

難有は稀有です。其の稀有に出會つたのだから有り難いのです。何とも思はず過して仕舞つたけれど、今日と云ふ日は生れて以來、始めて出會つた日で、これから先の生涯、何んなに長命をしても、又と再び出會へぬ日なの

です。一生を通じて漸くたゞ今だけ、稀に會

ひ得た此の稀有の一日を、有り難いと思はな



かつたのはらかつでした。熊谷蓮生が法然上人を訪ねて、犯せし罪過の恐ろしさを訴へ、救はる可きの道を求めた時、上人は無論、念佛の一法を勧められた。其れに對する蓮生の述懐がよろしい。「其の罪の償ひには、手を切れとか足を切れとか云はれるかと思つて居たら、たゞ念佛だに申せばよいと云はれて、餘りの有難さに、泣けて泣けて仕方がなかつた」と。意味すこぶる深重である。特別な行法より却つて念佛の方が有難い。矢張り、當りまへが有難かつたのです。

當りまへに着て當りまへに食べて、當りまへに寝て當りまへに起きて、そして當りまへに斯うして働ける。これが何よりも有難いのです。此れが佛教の基本的信仰です。其の佛教信仰の極地として法然上人によつて開顯されたのが、本願念佛の法門なのであります。

す。

私は斯うした説教を所々で繰り返すので、先年、或る席でした。某中等学校の主席教諭が居られて、盛んに共鳴の意を表して居られたが遂に「であるものを（あたりまへが有難い）今どきの若い者は、有難いことを當りまへだと思つて居るから仕方が無い」と叫び出された。面白い對句です。『當りまへが有難いのに、有難いことを當りまへだと思ひ過す』此れは確かに考へさせられます。よく聞いて見ると、其の學校の卒業生が上位學校へ進學して、そして母校の職員室へ元氣よく這入つて來て、正しく敬禮はしたでせうが、
「今回、〇〇學校へ入學しました。報告いたします」
並居る教職員一同口アングリ、物云ふすべも無き様子に、此の主席教諭は耐りかね、其の卒業生に近づいて、胸さきをドンと力まかせに突きとばし
「其んな挨拶の仕方があるか。五年の間、左様な教へ方はせなかつた積りだ。云ひ直せ」

怒氣を含むで一喝を喰らはせた。急に胸さきを突かれ、ヨロヨロと二三歩退いたが卒業生、漸く立ち止つて考へた。

「ハイ、もとへ」

流石は優等生です。シツカリして居ます。

改めて三步前に進んで叮嚀に頭を下げ、

「おかげさまで、今回〇〇學校へ入學させて頂きました。有難う御座いました」

此れで職員室の空氣は和ぎました。近づいて手を握る先生、後ろへ廻つて肩をたたく先生、一同は大ニコニコ、

「お芽出度う」

「其りや好かつたネー」

「何うだムヅカシかつたか」

祝ふもの、いたわるもの。

私は其の場の光景を想像するに難くは御座りません。初め、卒業生に取つては、黙つて居ては悪からうけれど、自分の實力で自分が入學した。力が有るから入れたのだ。あたりまへである。報告さへすればよい筈だ。

「今回、入學しました。報告いたします」一

往の禮は其れで足りる筈であります。然し事實に於て、其れでは職員室が遙れなかつた。何故でせう。其のあたりまへが有難かつたのであります。自分の實力と云ひますけれど、獨りでついた實力でせうか。五年の間、いやや數へ出したら切りが無い。育ての力、教への力、かげになり日向になり、無事に進學して呉れよと、直接の師は元より、間接の先生までが心配して下さつた「おかげ」では無いか。よく／＼思ひ見るがよい。表を見れば「當りまへ。」かげに氣がつけば「有難い。」此の表裡内外が一味となつて扱へるとき、當りまへが有難いと喜べるのであります。これが究極した信仰の世界。有難いことが當りまへにしか思へぬは無信の徒、有難いことを特別に探し歩くは迷へる輩。求道の友よ。須らく一躍、當りまへが有難いと正信の域に進まれよ。念佛の法門は、義なきを義とし、様なきを様とす。其の義なき様なきところが却つて有難いのであります。南無阿彌陀佛。

俳壇

太田
耳動子選



大阪府 伊藤 哲
五十九の明けて六十となりけり
評 最も平凡な表現であるが、眞實味が溢れてゐる。

大津陸病 大場 秀史郎

富士見ゆる仲仙道の大根かな
評 下五字が唐突な表現であり、中七字は之を助けて不離不即の間に一景をかもしてゐる。

東京 三野 輪幸郎

枯蓮の爆音高く通りけり

評 よく晴れた枯蓮の池に冴えた音高らかに飛行機の来り去るを思はせる。

島根 石見 千翠

宣戦の布告を告げて彌陀の冬

秋田市 鈴木 白舟

風の刃に切られ焚火の焰かな

兵庫 水谷 良子

稲叢の鳥銃音きゝながし

朝 満 三浦 雪夫

秋寂びて幽かなる夜のすゝみゆく

東京 森田 法晃

醒めがたき魂に沁みくる柚子湯かな

京都市 愛 發 紅芽

大根洗ふ背に山門の閉づる音

大分縣 河野 善隆
鐘の音聞ゆるごとし兎狩

小樽市 平井 善慈

文鎮の二階あかるき初日かな

北海道 渡邊 前野 賢一

鳥賊攻めに合ふ渡島地の秋深し

岩 國 長岡 白朝

縄を何處にとらん草紅葉

大阪 北垣 木瓜

君知るや嚴しき中の寒さく

福岡 村 上 靜夢

遊びがてら子の拾ひある落穂かな

相生 田島 波光

花八手住み古りて居てこぎれいに

名古屋 堀 堀 典雄

はた／＼の飛んで校庭しづかなり

室戸 堀 山 素堂

埋火を圍みて酌むや霽酒

栃木 大輪 玄海

瀧の音聞こゆる徑の草紅葉

深川 清水 貞水

蔓草の花のあはれに初給

北海道 清水 保子

北風の音さへ寒くなりけり

茨城 眞木 謙太郎

白菊や秋月かそけく庭鋪て

京都 岡野 靜月

仰ぎ見るたつた一葉に風傷し

愛媛 喜安 明月

初霜や子等遊びたる葉の上

滋賀 重野 ふみ子

増産の一役落穂拾ふかな

栃木 大輪 清

秋雨と散る木の葉とて傘ひらく

東京 清水 金鈴子

遺骨歸る道しとぬれ霧晴るゝ

兵庫 高室 閑齋

木魚の音天心にして秋澄める

大阪 北垣 木瓜

月牙ゆる此の山道を遍路して

北海道 花田 順往

春寒や征野をしのぶよすがとも

島根 仁 阿彌

時雨来て往き來の人のあはたし

越中 内山 徳堂

立山のひだ深まざる時雨哉

東京 船津 思露生

日向ぼこ時計に移す眼の眩み

香川 日向 法圓

くれないに散りつもりたる椿かな

札幌 金 石 正夫

木の葉ちる冬こそ吾に迫り来る

丹波 寺田 玄信

東京 渡邊 一念
鵬なくや窓をかざりて陽燃ゆる

朝鮮 三浦 砂千子

勤勞へふみわけてゆく朝の霜

同 三浦 由紀子

鐵瓶の湯の音聞えてあたゝかし

無 名 草

柿五つのこりたる木と枯野かな

秋田 後藤 晴子

鼻よせて霧吸ふ牛の寒さかな

島根 齋藤 良雄

山茶花や濡れし匂ひの深き闇

廣島 神原 抱池

百千鳥の聲物打つ音にまぎれざる

長野 宮澤 榮子

紅葉の暮れ早くして灯がともる

満洲 八木 茂

新春や四方の山々雪ひかり

京都 佐伯 靜圓

増産や薑白菊隅に咲き

大阪 森 正 義

飛びきたる紅葉封筒に入れにけり

東京 渡邊 貢子

音もなく山茶花散るや雨模様

長野 宮澤 圭子

誰人か木犀の香を残しゆく

横濱 田中 玉泉

師走街曆賣る人濡れてゐる

同 田中 玉泉

投稿規定

官製はがき一回二句以内
とし住所氏名明記の上
てに送ること



實弟五十六大將を語る

人となりを示す少年時代——

高橋嘉壽

浪濤高い太平洋上で、橋頭高く乙旗を
かけ、緒戦に於て早くも敵の主力を撃滅す
るといふ有史以來の武勳を輝かせた聯合艦
隊司令長官山本五十六大將は、長岡藩（新
潟縣）の士族高野家の生れで、のちに同藩
の筆頭家老山本家を繼いだ。筆者高橋嘉壽
刀自（七）は山本大將の實姉で、長岡市觀光
院町に住む唯一の肉身である。（寫眞は筆者
と山本大將の肖像——長岡にて川端祐輔）

きかん氣な少年

いまはむかしとすつかり變つて、五十六が
少年時代を過した玉藏院町（長岡藩の士族町）
のあたりでは、私達の生家高野家が残つてゐ
るばかりであつて、當時あつた家は一軒も見

られなくなつてしまつた。

五十六少年が未だ腕白盛りであつた頃、お
神樂をみるのがとても好きであつた。私は五
十六が生れた年に高橋家に來てゐたのであつ
たが、諏訪社のお祭りが始まるといつも私を
誘つては見物にゆくのであつた。そして私が

「もうおそいから歸りませう」

と云ふのをきかずに、私を先きに歸してし
まつて、夜の更けるまで見てゐた。その當時
の諏訪社の森（現中學校附近）はほんとに淋し
い場所で、ときには双傷沙汰さへあつた位の
ところであつたが、五十六はいつも獨りで悠
々歸つて來るのであつた。

彼はこんなにお神樂が好きであつただけに
自分で舞ふことも上手であつた。殊にこの地

方で盛んであつた盆踊り、お盆を兩手に持つ
て踊りながら舞ふことが上手であつた。父は
彼の踊りを見るのが大好きで、一杯飲むとす
ぐに、

「いそ（五十六の略稱）一つ踊つて見せよう
ぞ」

と所望しては彼に踊らせ、彼もまた父のい
ひつけ通りいつも氣持ちよく立ちあがつては
踊るので、父は手を打つてよろこんでゐた。
五十六といふ彼の名前は父が五十六歳の折に
生れた子供であるところからつけたもので、
老いた父にとつては目の中に入れても痛くな
い位に可愛いらしく、彼の輕妙な踊りにはい
つも堪能するのであつた。

また彼は幼い時分から負け嫌ひであつた。

それで剣道も達者であつた。當時の剣道は好んで長刀を用ひるの風があつたが、彼は逆に短剣を好んで使つてゐた。そしていつも、敵

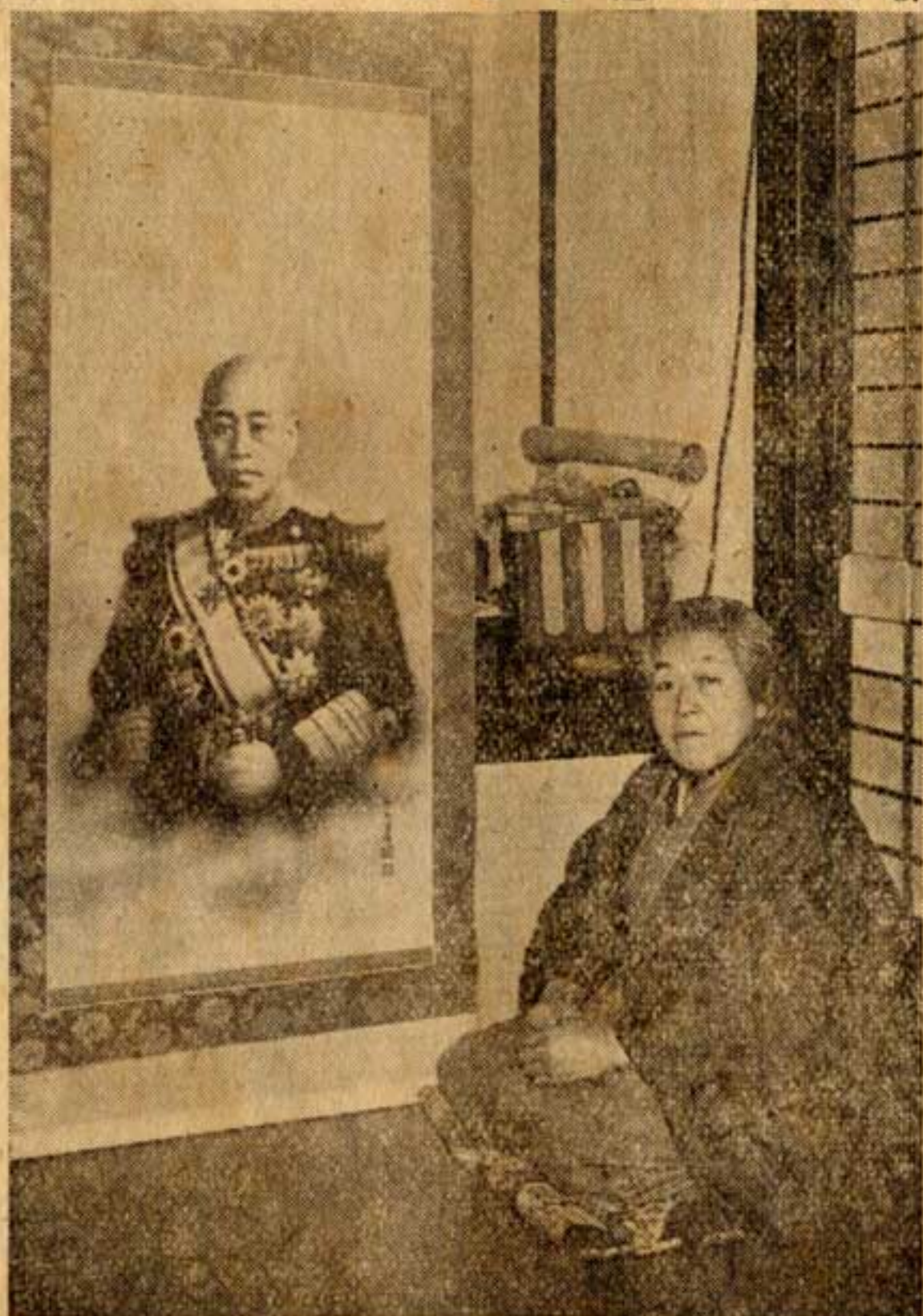
の手中に踏みこんで斬る勇氣を養ふためには短剣の修業がよいのだと云つてゐた。これは短剣が敵の懷ろに飛込んで刺すといふ武器であつたからである。この考へは大將になつた今も尙、彼の頭の中にあるのではないかと思はれる。

尤も剣道の外に、勝負ごととは何んでも強かつた。ある時彼は冗談に、

「もし現役を退くやうなことがあつたら、モナコに行つて博打王になり、米國の油田を買ひ占めるんだ」

と云つて笑つたことがあつた。

将棋も仲々に強かつた。しかしこれは單なる遊びとしてやるのでなくて、作戦の餘技と



るやうに努めるのである」

と云つて、「王の眞正面から攻撃するのが一番愉快だ」と笑つてゐた。ある時、さる高貴な方と将棋のお手合せをしたことがあつた。その折などは彼が勝ち放しであつたので、側にゐた人が、「せめて、一度位は少しおゆすりしては：」と云はれたが、「私は誠心誠意御奉公申し上げてゐるのだから、苟くも情實はゆるされない」と云つて、遂に三日間にも互つて勝ち放してしまつたと云ふことである。

厚い義心と報恩

五十六がやゝ成人した頃には、高野家も山本家も何うも不如意勝ちなことが多くなつてゐて、彼を中學に

入學させるさへ容易なことではなかつた。そ

こで五十六少年の英才がそのまゝ枯れ朽ちてしまふのを惜しんだ長岡社では、育英資金の補助をしようと申し出たものである。その時

してゐあつた。だから彼は、

「單なる娛樂として考へてはならぬ。いやしくも戦ひである以上、眞剣でなければならぬ。自己の有する力を常に遺憾なく發揮出來

父は固く辭退して仲々受け取らうとしなかつたが、彼は父とは異つて、

「立派に出世してから御恩返しをすればよいではないか」

と云つて喜んで學資金を受けたのであつた。このやうなわけで中學に入り、當時受けた恩がききに銘じてゐたのであらう、それから先き専ら學業にはげんだことであつたが、今日になつても彼が「世界、日本、長岡」といふことを云ふのも、同じく少年の折に受けた恩をかへすべく努めてゐる證である。郷里長岡のことは何をおいても親身に考へてゐるらしく、毎月十九日に開かれる長岡社の會合には萬障を繰り合せては參集してゐた。また長岡の後輩のことは親も及ばぬ位に世話をするので、現在郷里出身の兵學校生徒二十人の保證人となつてゐる。そしてこの生徒に關しては成績や操行は勿論のこと趣味に至るまで調べ、一々直接逢つては激勵してゐる程で、彼等に對してよく「先輩は大いに利用する」とだ、利用したなら必ずその人の顔をよこし

てはならぬ」

と教へてゐた。

少年五十六の勉學時代は、よく困窮に耐へねばならぬ境遇であつた。おずか一疊しかない粗末な勉強部屋で、彼は味噌をなめなめ苦學してゐたもので、その時の生活は今になつても尙忘れず、武人としてよく質素をむねとしてゐる。

いつであつたか、彼が大佐であつた頃母校の坂上(國民)學校を訪れて、記念撮影をなすこととなり、中央の椅子をすゝめられたが、學校の長は校長であるといつて固辭し、結局母校の校長のわきに立つたのも、彼のほんとの氣持からであつた。

たゞ奉公あるのみ

かつて日露の役には軍艦「日進」に山本少尉として乗り組んでゐた。そしてあの大戰に彼は左手と右足を負傷したのだが、その時に血止めのために用ひた白布には母の歌つた

君のため國のためには盡せかし

散りても馨る武のはな

の一首が、父の筆によつて記されてゐた。

またある時、横山大觀畫伯が「私の心血を注いだ一幅を是非お受け願ひたい」と、彼を敬慕するしるしにと申し出られたことがあつたが、彼は

「御厚志はまことに有難く御禮を申し上げますが、國家非常の折に折角の御勞作を靜かに鑑賞してゐる暇がないので、閑地について、もしその餘裕が出来たら、私の方から更めて願ひをします」と

と辭退してしまつた。

一昨年二千六百年記念祝賀の式に、宮中にお召しにあづかつた時に、支那軍がその隙に乗ずるやうなことがあつては海の守りを全うし得ないからと拜辭したのも、彼の胸中がただ至誠奉公あるのみであつたからに外ならぬ。今も尙太平洋上で重い任務に、ただ大君のため國のためにすべてを捧げて働き抜かうといふ覺悟に燃えてゐることであらう。

(文責在記者)

隨 想

二 題



法 然 主 義 と

申 し 上 げ 度 き こ と

醫學博士 北 條 春 光

大東亞戦争の完遂を目的とする刻下の私共にとつて必要な事柄は数々ある。吉水の清き流れをくむものとしてかくの如き千載一遇の好期に際會した事は何と言ふ幸福であり本懐至極であらう。そして取りもなほさず私共が吉水の清き流れをくむと言ふ事が一旦緩急あつた今日に於てこそ最も必要な事であり緊要な事になるのである。法然上人の一代の御垂範を偲び参らすならば其處に吾々は難有い一大思想大系の裏付けがある。實踐第一主義とでも呼び奉る様な法

然主義を見出す事が出来る。主義と言ふ程のものであるならばその中に生活態度もその主義通りにじみ出て居るものでなければ人を動かし人を生かし人を死なしめる程の力を有しては居ないであらう。

○

世に主義は滿天の星晨程もあつけれど人を生かし人を死なしむる底の主義は、曉の星の如くに少いものである。當時各宗の聖僧は上人を智者第一と尊稱して居る。誠に深遠なる法談は多年の御研鑽の片鱗に過ぎぬものであり眞に上人の學識は測り知れざるが如き硯學であらせられた。然し乍ら人生の重大事に處するのすじ道は萬人の實踐の上に深き思念を凝らされた念佛爲先の教のみであつたのである。

この點を吾人は深く反省し洞察しなければならぬ。單なる理窟でもなければ演説や宣傳でもない。如何に勝れたる理論でも單なる名論卓説では刻下の邦家の要請に耐え得ない筈である。鋭い自己反省からのみ生れ出するものを有して居る實踐主義である吉水の流れの教はそれ故に凡百の空理に優れて居るのである。自ら臣道に徹したる大聖が死中に生くる道を明示せられ已死すとも伸び行く國あるを説かれたるみ教は大東亞建設に當り否新らしき世界を創造せんとする時に當り日本に生れたるものとして之を世界に誇るに足る光な

りと言ふ事が出来るであらう。

○

私はひそかにわが法然上人のみ教を世界的なる實踐主義であると考へ又自分が理解して居る範圍に於てはそれが法然上人のみ教の眞髓であると考へて法然主義と申し上げ度いと思つて居るものである。そして私は及ばず乍らに遅々として現に實踐して居るものであるが到らざるの點は常に寛容なる御教示を希念してやまぬものである。

法然上人の御名號軸

望月信成

佛教を國に禮拜の對象に偶像を要求したことは古く印度に始まり支那を経て日本に傳はつて益々佛像禮拜の熱は隆盛を極めた。茲に信仰の必然的要求と歩調を全く同じふして佛像の造立が行はれたと稱すべきである。であるから佛像彫刻又は佛畫の發達は全く佛教信仰の進展と正比例をしてゐる。

しかし六字の名號や法華題目の様な文字を禮拜の對象として奉安

したことは決して古いものではない。少くとも鎌倉時代以前に行はれてゐたとは到底考へられない。それで私はこの方面にかなり興味を持ち、何時頃から名號等の文字が本尊としてまつられる様になつたかを考へて見たくなり、常の研究の合ひ間に氣をつけて來た。所が世間によく法然上人の御名號なるものがある。最も多いのは母妙海の爲めに上人が書いたといふ名號であるが、淨土宗の由緒寺院には大概一幅か二幅は秘藏してゐる程、多數に存在するものである。しかし現在の所私はその遺作が一つとして上人の眞筆と肯首し得るものを見たことがない。

先づ絹や紙の質から見て室町時代の初め頃と考へられるものが最古で、あとは殆ど室町時代末か徳川時代のものばかりである様に思ふ。それで本當に法然上人の御名號なるものが存在してゐたであらうかを考へて見た。

世間には弘法大師等の利劍の名號とか、聖德太子様の御名號とか云ふものがあるが、これとても本當と思はれるものは一點も見たこともなく、皆等しく室町時代以降のもののみである。こんな點から考へて法然上人の御名號の様に鎌倉時代初葉のものがはたして世の中にあつたであらうかの疑問が生じたわけである。

○

正安元年八月廿三日西方行人聖戒が書いた奥書のある一遍聖人得傳が京都の歡喜光寺にあるが、それに依ると聖人が人の爲めに六字の名號を書いて與へたり、又諸堂の壁などに名號を書き残しておいたと云ふ記事が見えてゐるが、これなどは六字の名號が禮拜の本尊となつたかなり古い文獻の一である。

又日蓮上人の所謂尊題目も恐らく上人時代に出來たものであらうから、文字を本尊とすることは少くとも鎌倉時代末葉には必ずあつたと考へるべきである。

○

しかし私はどうしても法然上人の活躍せられた鎌倉時代初葉頃には「文字を拜む」思想は未だ起つてゐなかつた様に思へてならない。漸く鎌倉佛教の祖師崇拜熱が法然上人入寂後から強調せられ、淨土教信仰が民間に徹底されてから——換言すれば稱名念佛思想が一般大衆化された時代即ち鎌倉中葉以降に名號を本尊として拜むことが案出されたものと想像したい。

後世の法然上人の御傳記の中にはやゝもすると名號を本尊とするかの如き記事を見るが、それは上人御在世の事實を物語るものでなくして、後人の常識から類推して上人時代も然かあるべしと斷定したものと考へなければならぬ。

従つて上人の書かれた名號が一幅の軸仕立となつてゐるとは全く

あり得べからざることと考へられ、そのすべてが後世の偽作であることを斷言して憚らない。

○

この名號軸の發生問題は全く興味あることであつて淨土教信仰史上解決をしなければならぬことと思ひ、いつか私は本格的に研究して見たいと願つてゐる。單に現在では多少の文獻的知識と日本佛教美術史研究家の常識として思ひつゝいたまゝを書き綴つたのであるから、或は自家撞着に陥り考へちがひをしてゐるかも知れない。何れ後日更めて確論を得たいと思つてゐる。

膽力強化

小心恐怖症

矯正新法
明進呈



◇小心恐怖症 ◇悲觀症 ◇羞恥癖 ◇内氣性 ◇お
くびやう癖等にわざわいされて ◇小事にくよ
く心配し ◇無闇に人を恐れ ◇物事に大膽さ
がなく ◇少しの事にあわてどもり ◇理由なく
目上の人を恐れる等の人は早く其癖を直さ
なければいゝ人との勉強し學科が出來ても大切な
試験場や他人との應對にあわてゝ大失敗を演
じいつまで経つても成功の第一歩に堂々と乗
り出す事が出來ないかやうな人も短時間で大
膽明朗となりどしどし他人に打ち勝つ度胸が
出來る新自宅矯正法が發表され大好評中「淨土讀者」と記入し至急
ハガキ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所

東京市瀧野川區西ヶ原町三四六

瑞穂社研究所

念佛と大島商船學校

藤 本 淨 本

山口縣大島郡小松町にある大島商船學校は、今から三年前、官立に移管され、海軍大佐佐藤敬三氏が初代の校長として就任いたしました。佐藤校長の持つておるでなれる教育理念は、該校教育の各方面に亘り着々實行に移されて僅々三ヶ年の間に、相當の成果を挙げられてゐますことは、國家の爲め定に同慶に堪へない次第であります。特に學校が宗教教育を取り入れて生徒の教育に資しておるでなれる事は、注目すべき事でありま

す。其の一端を此の誌上を借りて述べて見たいと思ひます。佐藤校長は夙に生徒教育上、男としての度胸、日本精神の把握、艱苦に對處する不動の信念の培養に熱心なる努力を拂つて居られるのであります。が、その教育法としては、軍人に賜はつた勅諭、教育に關する勅語の御精神を實行に移す様、隨時隨處、是を高調しておるでなれるのであります。その爲めには、單に從來一般の學校でやつて居る程度の教育だけでは不十分で、どうしても神佛に、仕へる信仰心から日

本精神へ誘導しなければならぬことを痛感せられ茲に宗教教育特に佛教教育を取り入れらるゝ事になつたのであります。該校は、三ヶ年修業の學校であります。其の各學年を分つて、同學年生徒を一團とし、五日間同郡屋代村西蓮寺に合宿せしめて光明會の「如來光明禮拜儀」に依つて別時念佛修養會を開催するのであります。

目下私に受持を依頼されました、導師として御心配申上げてゐるのであります。が、生徒の眞剣なる事は、驚くばかりであります。

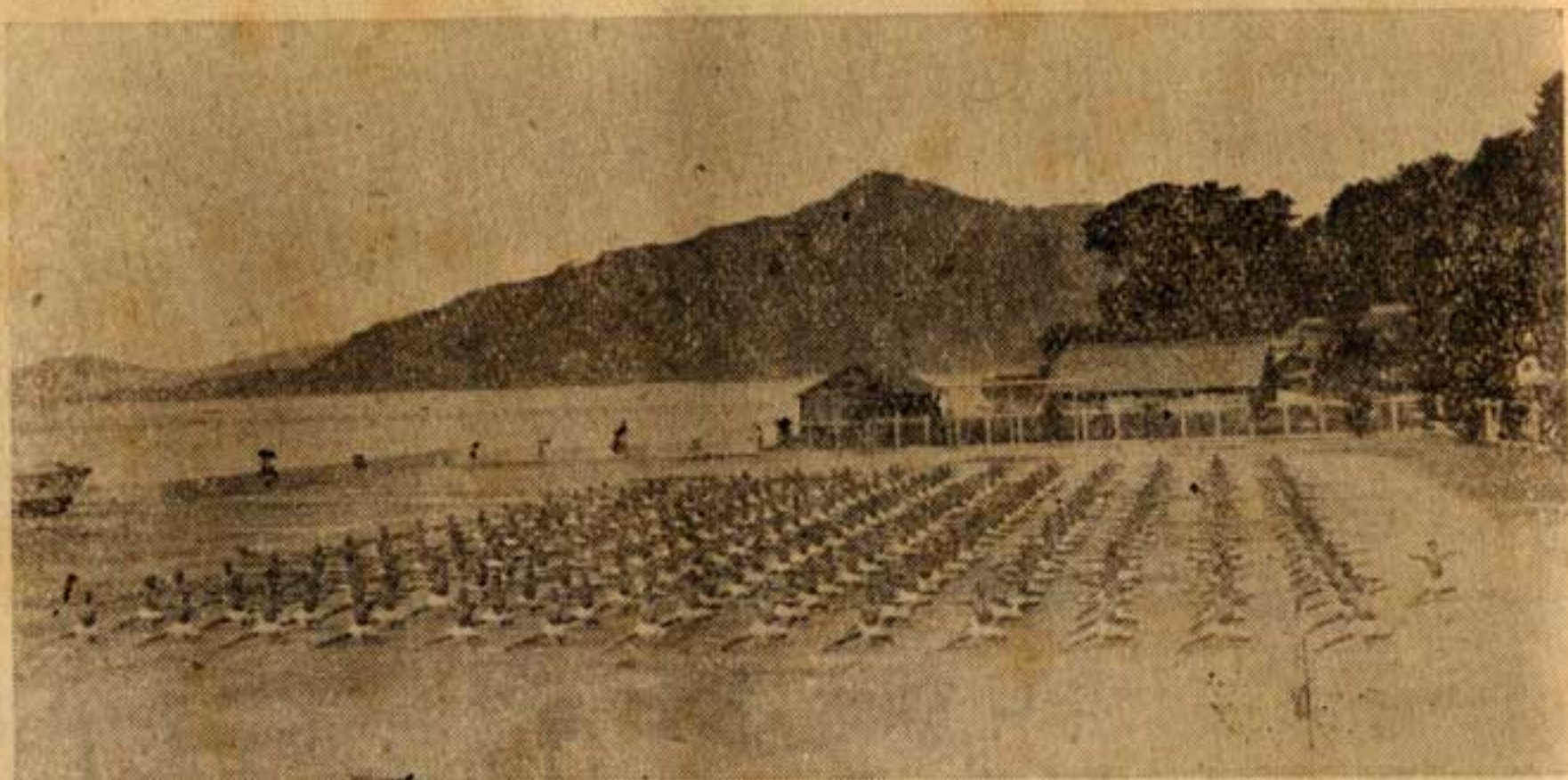
早朝未明に起床いたしますと、生徒は黙々として掃除、洗面をすまし體操をやり、それがすむと皇居を遙拜し默禱を捧げます。終つて朝の禮拜に移ります。それから朝食をいたし午前の講話を二時間半にわたつて靜聽し、聖歌を朗誦しそれがすんで體操をいたし晝食となります。

晝食後少憩の後午後の禮拜講話にうつり夕食となります。夕食後は、また夕の禮拜をいたし講話を靜聽し反省の後靜かに臥所に入るのであります。一日の行事は、全く目まぐるしい聖業の連續であります。が、いささかも倦む色が見えません。はじめ一日位は、初めて唱へる念佛に嗤笑の感を持ち、然らざる者も「變な感」を抱いて居る者が有り會場が何となく落着かぬ所がありますがもう二日目から

は、靜肅そのもので講話を聴く態度も念佛を唱へる態度も聖歌を合唱する態度も全く三昧の境地に入つてしまひます。

青年期の學徒に能くある寺とか、念佛とか申すものに對し全く没交渉に考へる態度が無く眞妙に如來の光明に浴せんとする有様は、ほんたうに頼母しい感じを抱かせます。

西蓮寺は丘陵である村の中腹にありまして、二百年前よりの古刹、幕末長州征伐を受けた時の大島本陣となつた由緒があり、俗塵から遠ざかり心身を清めつゝ如來の光明三昧に入るのに好適の聖域であります。禮拜、念佛法話等の行事が一日を重ねる毎に三昧の深みを加へ佛凡融合の雰圍氣に漸次包まれて行きます。五日間の修業を終へて始めて歸校するのであります。



(大島商船學校の丁抹體操)

が、其の初め山門を這入つた時の生徒とは、全く見違へる程の變化があり無量壽如來の光明を歎譽し其の身心に如來の靈應を感じ安置する状態に立ち至るのであります。

佐藤校長の夙に高調する宗教教育は、事實此の成果と成つて具現されるのであります。「生徒を教養せんとせば先づ教師から——」といふ校長さんの主張から昨年の夏季休暇には、廣島文理大の山本幹夫博士を講師として商船學校教官一同の

佛教修養會を五日間、やはり私の寺院で開催いたしました。教官の佛教に對する認識、信念、態度、惹いては全般の生活態様と云ふものが、變つて來たとは校長並に教官達の齊しく口にさるゝ所であります。

念佛と大島商船學校——念佛に統合して、教育の淨化を圖り訓育の徹底を期すると云ふ事は、何と云ふ崇高な教育方法でありませう。御承知の通り文部省の教育審議會に於ても此の問題が論議せられ宗教教育の必要が高唱せられてをります。無限絶大の靈覺に透徹せしめて確乎不拔の信念を培養すると云ふ校長さんの御意見に心衷共鳴せざるを得ません。

この宗教教育に依つて、もたらされる効果は、是から十年後二十年後、イヤ一生の間に現れるもの

であります、最近早速表れたものは、

- (1) 生徒に落ち着きが出来た事
- (2) 困苦缺乏に堪へ得る力の増強した事

- (3) 不良生徒であつて普通の學校に於ては當然放校處分にもなるべき者が此の佛教教育に依つて觀意改善せられたる事

- (4) 行儀作法が良くなりたる事
- (5) 粗暴卑劣な舉動が無くなつた事

- (6) 素直さの中に何ものにも屈し無い強さを持ち出した事
- (7) 何事にも感謝の心を抱き奉仕の觀念を持つやうになつた事

- (8) 横須賀海兵團の軍事訓練、吳工廠の實習生活等に於て其の態度仕振が宗教教育を受けなかつた前年度の卒業生と比

較して著しく向上してゐる

事をハツキリ認め得らるゝ事等挙げ來れば、此の宗教教育の成果を見る可きものが多々あるとの事であります。

學校に於ては、この五日間の修業の外毎日の學校行事の中に、宗教的と見る可き行事を加味して常に、敬虔の念を養つてをられます。

一日三度の食事の前後には、合掌して光明會の食作法に由つて「大みおや」に感謝し奉り起床就寢の時刻には、左の誓を朗誦して常に反省させてゐます。

朝の誓ひ

- 一、我等ハ皇國ノ大恩ヲ感謝シ身命ヲ賭シ至誠奉公スベシ
- 二、我等ハ我執ヲ捨テ士魂ヲ練リ天地神明ニ愧ヂザルベシ
- 三、我等ハ自奮自勵海國日本ノ爲メ協力邁進スベシ

夕の反省

「日曜」

- 一、生徒としての體面を汚すことはなかりしか

- 一、不攝生をせざりしか

- 一、不正なる行爲はなかりしか

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

「月曜」

- 一、嘘を言はざりしや

- 一、友達を裏切ることなかりしや

「火曜」

- 一、教官に注意を受けざりしや

「水曜」

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

「木曜」

- 一、分隊長教官に心配をかけざりしや

祈らずとても神やまもらん

右は一例を挙げたのであるが、毎日右の如き反省文を朗誦して精神修養に努められてゐます。前記の外尙参考となる様な教育の内容を述べて見ますと、教授方面に於ては、自學自習即ち自ら開拓自啓することを主眼として居ます。是を換言すれば一つの念佛を基とした修業と見ることが出来ます。所謂追従模倣で無くて、各自が如來より享けた本然の性能を、念佛信仰の中に自習啓發するのであるから偏に念佛修業と見るべきものであります。

又他校には滅多に見ざる宗教的音樂教授、拔刀術を施して前者は聖の教育に後者は不動心の教育に資して居るのであります。

體育養護方面に於ては西式健康法、丁抹體操、玄米食を採用して

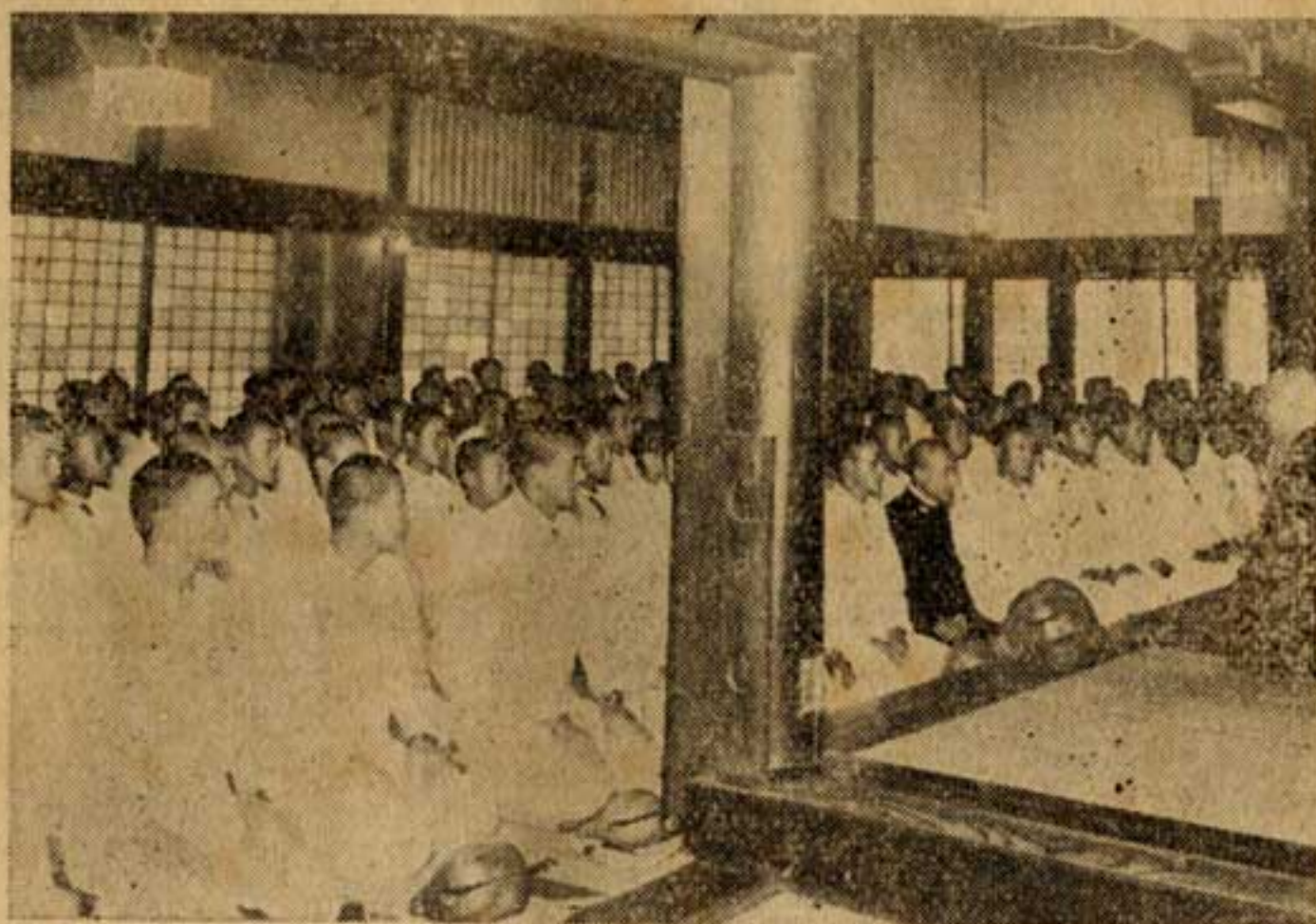
居られます。此等は何れも阿彌陀佛に歸命して生きるも働けるも御佛の御蔭、此身

該校に於かれては、生徒の身體は先づ病氣しない身體をつくる爲

國恩の塊りと云ふ感恩の精神に基く自重的信念の下に敢行しなければ出来ないう事で、放縱自由な心身態度では其効果を擧げらるべくもありません。是等もよく究めて見れば念佛に發した教育方法と見るべきであります。

別時念佛修養會

に於ても學校から炊事夫を派して玄米と粗末な副食物に由つて五日間を頑張り通されるのであります。



めに玄米食の正しき攝取及び西式健康法の示す方法に由り日常生活

を合理化し心身を淨化すると共に丁、抹體操に依つて鍛鍊し身體の剛強忍耐力を養つてゐられるのであります。

訓育方面に於ては、前申す通り宗教教育を十分に取入れて不動の信念を涵養し一朝危急の場合に遭遇しても泰然として爲すべきことを爲す人格を養成してゐるのであります。

要するに大島商船學校が、念佛精神を基調とした教育に精進してゐる事は事實で、その念佛を通して宇宙の靈力に透徹し日本精神の眞髓に觸れしむると云ふので此の點、佐藤校長の御識見に敬服し、國家の爲め慶賀に堪へない次第であります。

同校は亦教育の方法として親心を強調せられ努めて、生徒の全貌を撫で育むと云ふ方法を執つて、

をられます。

全くの學校淨土であります。この眞の學校淨土を本州の西端大島郡に見出したことは、有難いことであります。

而も同校教育の目的とする所は、かくして得せしめたる身心を持つて、臣道實踐、職域奉公に盡さしめ完全なる皇國民として高度國防國家建設に邁進せしむると云ふにありまして、同校が海軍豫備員の養成にあつて、一朝事有れば生徒は帝國海軍の艦艦に伍して第一線に立つと云ふ重大な役割を持つてゐる事より推して、其の教育が魂から鍊成して行くと云ふ事實は非常時下大日本帝國の爲めに、感謝せざるを得ません。

(寫眞は大島商船生徒の念佛修養會法話)



多田院開帳

上 司 小 劍

近松門左衛門

門の作品に

『多田院開張』

といふのがあ

る。讀んだこ

とはないし、

あまりあたら

なかつた戯曲

で、いくたび

上演されたかそれもわからぬ。おそらく初演のままであらうと思

ふ。その多田院といふのは、攝津の川邊郡にあつて、猪名川の上流

にあたる。そこに新田城といふのがあり、源満仲や頼光やつづい

ては行綱といふ二跨武士なんぞの居城になつてゐた。行綱は多田藏

人と呼ばれた。ズツト後には鹽川伯耆守といふ男もそこにゐたらし

い。猪名川は多田川となつて、そこを流れてゐる。もと多田院の馬

場先きの入口になつてゐたところへ、別に小さな川が注いでゐる。

それを鹽川といふのだ。その上流の川底に礦泉が湧出し、幾分川の

水に鹹味があつたので鹽川と名づけたのかも知れない。それが領主

の名になつたのであらうか。馬場はもと兩側に松の古木が鬱蒼と繁

つてゐて、甚だ風致がよかつたのだが、いまは大部分伐り拂つて、

工場や貧民窟のやうな長屋が建ち並んでゐる。この松かさの多い並

木道のまん中あたりに、昔小學校があつて、私はそこで學んだので

ある。

今度久しぶりに大阪へ講演に來た序をもつて、私はなつかしいこ

の山村を何十年振りかでおとづれてみた。小學校は國民學校となつ

て、やはりもとの並木道の貧民長屋の奥の方へ私の學んだころより

はズツと廣く建てられ、田舎はどこも同じやうに、學校のすぐ側に役場がある。並木のなくなつた馬場先きを、折からの土曜日に、可憐な國民學校兒童は男女とも、鍬や竹箒を手手に、道路の修繕と清掃をやつてゐた。代用教員らしい二十歳ぐらゐの青年が、それを指揮してゐる。私はそぞろに私の昔の姿を思ひ出した。私も家が貧しかつたので、十七八歳のとき、ここで小學校の代用教員をしたことがある。それが二年ぐらゐつづいたであらう。昔は小學校の兒童といへば、社寺の境内や道路を荒らしたりするものときまつてゐたのに、いまは反對に、勤勞奉仕として、掃除することになつた。變れば變るものである。社頭を通つても、誰一人頭を下げる人のなかつたお宮の前を、いまは國民學校の兒童やその他の人々が、みんな帽子をとつてお辭儀して行く。

さて、多田院といふのは、忍性菩薩を開基とするが、實は源滿仲入道滿慶(後に覺信と改む)の創建にかかり、維新前までは奈良の西大寺に屬し眞言律宗であつた。律はもと希臘正教から出たもので、愛染明王はすなはちキウビツであると、故有島武郎に聞いたことがあるけれど、ほんとうかどうか知らない。有島もあまり自信のありさうな口振りでではなかつた。多田院も、いまは多田神社となつて、スツカリ佛縁をかなぐり棄てたが、もとは兩部で、それも八分どほりは佛寺といふべく、鷹尾山法華三昧寺多田院と號し、社領五百石を有し、別當は代々奈良の西大寺から來てゐたのである。

寺領奉還の後には、ひどく荒廢して、建物は腐朽し、廣い境内に雜草離々として、麥秀の嘆を深からしめたが、この時季に私の父はこの社の司として、私をば廢墟のやうなところで育てたのである。「源滿仲千年血食の地」と言つたやうな言葉を、私は少年のころ父に教はつてよく口にしたものである。行基の創作かどうかは知らぬが、本地垂迹説は、民衆の間に拔くべからざる力となり、日本の國神が、印度の神々の權り現はれであるといふ所説も、度會神道や、吉田神道が起るまで、あまりに問題ともならず、徳川時代に入つて、儒者や國學者の痛烈な本地垂迹説撲滅論も、民衆の間には大した影響なく、本居宣長や平田篤胤の熱心を以てしても、なほ且つ民間に染み込んだ權現の意味を正しく諒解させて反省を促すまでには至らなかつた。

かくして、明治維新とはなつたのである。さうして、それまでは言はば學者の机上論であつた兩部神道排撃の聲は、ここに排佛棄釋の彈丸となつて實行に移され、方々のお宮ともお寺ともわからぬ場所から、佛像佛具が掃き出すやうにして棄て去られた。個人の家でも、いささかあはてものは、佛壇を持ち出して、叩き碎いたり、焼き棄てたり、川へ流したりしたものがあつたさうな。

多田院はこのとき多田神社となつたのである。さうして、先づ破却されたものは、釋迦堂であり、削り去られたものは、石燈籠に刻られた大權現の文字であり、運び出されたものは、南門の仁王尊で

あつた。しかし、神社の正式な祭祀法に合はない本殿の木像は、そのままになつた。それは源満仲の自作と稱する彼れが二十四歳のをりの騎馬の彫刻である。何分内陣深く幾重もの扉や簾や錦欄の戸張の奥に安置してあるので、私もつくづく見たことはなかつたが、近松の題材になつた開帳のときは、この木像を衆人に拜せしめたのである。連錢草毛の駒に跨り、鉄形の兜に緋緘の鎧、太刀を佩いて弓箭を帶した姿であるが、白い顔に鋭い眼が、人を射るやうであつたのをおぼえてゐる。高さは漸く一尺五六寸くらゐでもあらうが、あややつて眞正面向きに拜禮されるやうに刻むのは、むづかしいことであつたらうと思はれた。開帳なぞといふことは、元來佛式のものであるが、明治以後にも一度これをやつたことがあるさうな。昔は五十年目毎に、徳川幕府から百兩とかの社殿堂宇修繕費が出て、それを機會に開帳したものださうで、維新後神式の祭典になつても、社司が開扉する場合、この木像までを現はして、参列者に拜禮させた。私の父の時代にはさうであつた。すべてが違式であらうが、別に咎めを受けることもなかつた。いまはどうか知らぬ。

多田院といふのは、もともと源満仲、頼光二代の墓所であつて、その前に社殿を造つたのである。言はば墓場の擴大されたものの、満仲が佛門に入つて剃髪したのであるから、この人としては、その墳墓の地を永久に佛寺たらしめたかつたことであらう。それが排佛棄釋の潮流に浚はれて神社となり、本尊同様の木像を神體とし

て、從來の金椀なぞを棄て、新調の入足机や高杯によつて神饌を供せられるやうになつたのは、地下の靈も定めて恐縮したことであらう。排佛棄釋の總本家のやうに思はるる平田篤胤でさへ、老後秋田に歸つた後は、飄然轉向して禪に歸依し、死後は佛式によつて葬られ、戒名さへ命けてもらつたといふではないか。

それから多田院は、満仲のほか、前記の頼光、それから、頼信、頼義、義家の四柱を相殿として、五座の扉が別々になつてゐるが、正面は前記満仲の木像で、左右二座づつも、すべて佛式の祀りやうであつたのを、私の父が神式に改めたのである。しかし、正面の満仲公騎馬の木像だけは、お厨子から何から、すべて純粹の神式にはなにくく、あたは華美を盡した金色燦爛たる結構さを棄てて全然清素なものにするのはむづかしいといふよりも、不可能であつたらしい。さうした具合で、ここは昔から源氏の宗廟のやうに思はれてゐたので、源家の安危は當院の盛衰によるべしといふ満仲の遺言がなくとも、源氏系統の政治力が衰へると、忽ち荒廢した。すなはち北條氏の時代に衰へたのを、足利氏の時代に再興し、戦國から平氏系統の織田氏、それから豊臣時代に至つては、全くあるかなきかの小さな祠堂になつたのを、徳川氏の時代に及んで、徳川氏が自ら源氏の末裔と稱し、後の長者となつたので、直ちに幕府へ多田院再興の願書を出したが、なかなかさういふことにはガツチリした家康も秀忠もまた三代家光も、徳川氏の宗廟は日光山一ヶ所であつた

さんだとばかり、とても受け付けてくれなかつたのを、當山中興と別當代々記にある智榮和尚といふ坊さんが熱心な運動の結果、漸く四代家綱將軍の寛文年度になつて、再興を允許され、初めは日光同様との申し立てであつたのを、以てのほかとばかり、現在残つてゐるやうな規模で、日光の何千分の一か何百分の一かにもあたらずにどの費用で造營を始めたのであつた。藝州の淺野侯も源氏の末だとやらで、私の幼少のころ、先代長勳氏がわざわざこの山奥へ參詣に見えたのをおぼえてゐる。淺野家は大江山鬼退治の頼光の後だといふのである。

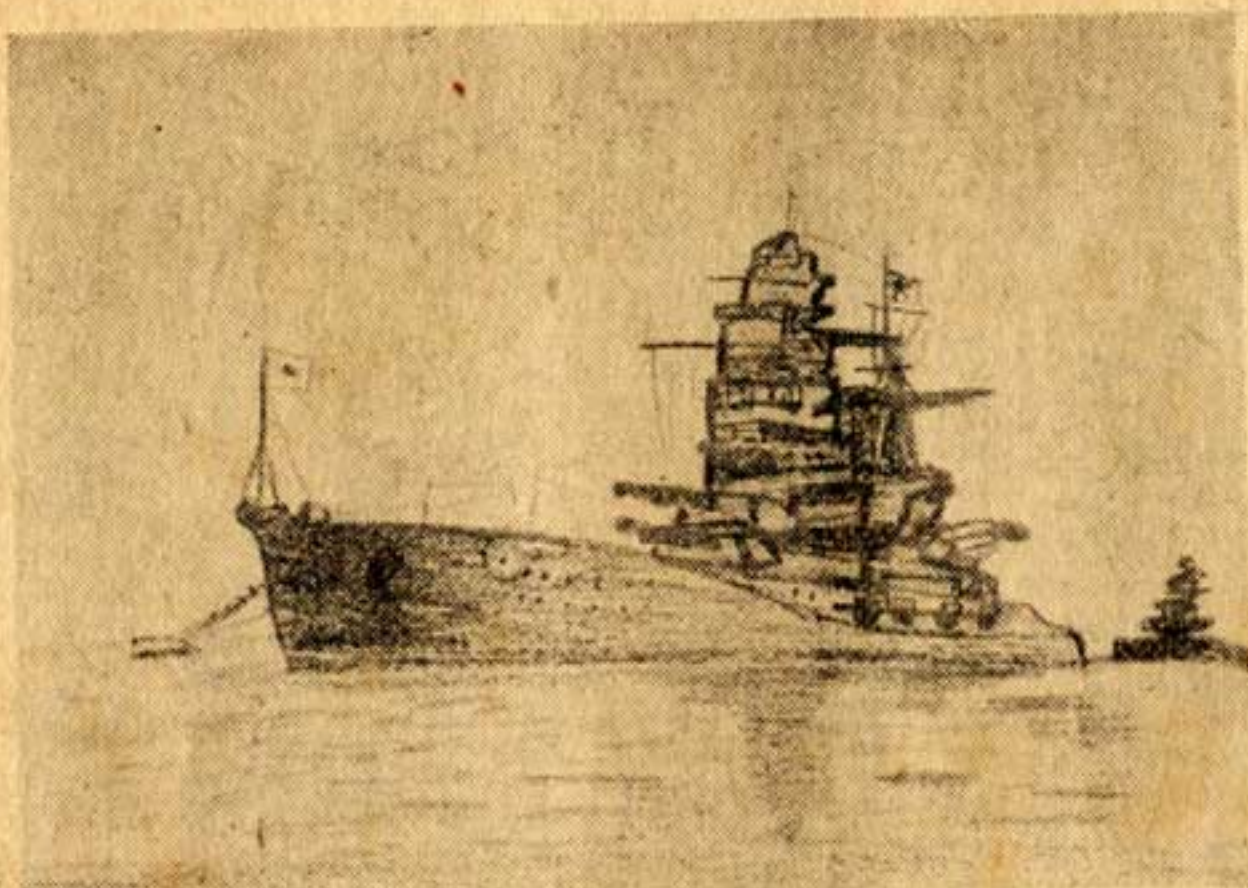
たとへ、五百石の小祿でも、昔はいはゆる御朱印地、幕府の直轄でなかなか威張つたもの、近くの小大名一萬石の麻田や三萬六千石の三田、四萬何千石の尼ヶ崎などで犯した小罪人は、多田院の支配地へ逃げて來て、それぞれの追捕を免れた。重罪人はそうも行くまいが、賭博犯ぐらゐなら、人を助けるは出家の役の意味からも、別當の名によつて行政司法を行ふ代官の係りで、形ばかりの小牢舎が境内の一部分別當館の隅の方にある代官事務所の側に設けられ、そこへ投獄されて、ほとぼりのさめるまで、それぞれの藩の捕吏たちを口惜しがらしてゐた。投獄とは名ばかりで、夜間は出入隨意、金を持つてゐるものなら、門前の料理屋でおそくまで遊んでゐたといふ。

その時代、葵の紋の勢力は素晴らしいもの、別當は律のことと

て、正装の法衣も柿色染めの質素なものであつたが、ここの別當在職中は徳川から拜領の緋衣に葵の紋を散らした袈裟をかけなければならぬので、それが厭さに別當を辭退する西大寺の長老もあつたさうだ。なかにはまたそれが得意で、江戸城へ一年おきに出て將軍の御機嫌を伺ふのを楽しみにするやうな俗僧もあつたとか。多田から猪名川に沿つて下流へ一里の池田といふ小都會までと、江戸では品川から芝山内の旅館金剛院までとは、十萬石の諸侯の格式を許され、登城の節はむろん本供だから、いくら道中の費用を儉約しても、五百石では賄ひ切れず、新任の年は所勞、三年目は病氣、その次ぎはもう更代（任期五年）で、江戸への參勤を免れる別當もあれば、また無理算段をして、一年おきに必ず出府する別當もあつたさうな。維新の變革の際まで別當職にあつた高判和尚などは、緋衣が好きで、出府が楽しみ、普通五年で更代する先例を破つて、十五年も別當職を楽しんでゐたとのこと。この高判の次ぎが私の父で、神佛混淆禁止、廢佛棄釋勵行のため直ちに神職となり、葵の紋の威力が俄に萎んで、昔別當の泊る旅館の門に張つたといふ幔幕は、三つ葵の大きな紋が薄く、染めつぶした青い色のなかに残つて、私の常用の蚊帳になつてしまつた。池田の町で別當が西大寺への往復に泊つた定宿は、造り酒屋で、葵の紋の幕を表に張り、近所の人々を憎伏させるのを大名譽とし、維新の後も一年に一度新酒を私の家に贈るのを忘れなかつた。

大東亞戦争
と綴方教室

僕たちのかくご



大東亞戦争の完遂を目指して一億の國民は火の玉となつて燃えてゐます。

この綴方と圖畫は東京市牛込區北町にある東京市立愛日國民學校初等科のかたちたちのものです。いづれも第二の國民として毎日勉學に勵む坊ちゃん嬢ちゃんだけに立派なものです。尙この作業を本誌にお世話下された糸山天眞師に厚く御禮を申し上げます。

(係)

日米英戦争

三年生 川村 敬三

昭和十六年十二月八日は、僕らがわすれやうとしてもわすれられない日である。日米英戦争が始まつたのだ。

八日の朝、ラジオのニュースで、「日本はいよ／＼米國英國と、戦争をすることになりました。」とアナウンサーが言つたので、僕は、飛び上るほど驚いた。あゝいよ／＼戦争が始まつた。」と思ふと胸がわく／＼する。

此戦争がどうして始まつたかと

いへばずつと前から米英は、日本のじやまばかりしてゐたので、日本はがまんがまんをして來たが、どうしてもがまんがまんがなくなつたからだ。

學校へ行つても、皆がや／＼戦争の話ばかりしてゐる。

修身の時間に先生が、

「戦争にばかり、むちゆうになつてゐないで、自分の事に身を入れないさい。皆がしなければならぬ事は、からだを丈夫にし、皆が心を一つにして一生けんめい勉強することです。」とおつしやつた。僕は、「ほんたうにさうだつた。」と思つた。

學校のかへりに、家々の門の前には、大きなたるに、水が一ぱいはいつてゐる。僕の家の前にも、水、砂袋、火たゝき、むしろなどのだら／＼がそろへてあつた。家の

中へは入れれば、何だかぼおうと暗い。それは、黒いまくをまどに、

はつてあつたからだ。するとお父様がいらつしやつて、

「戦争の始めだ。八幡様へおまゐりに行かう。」

とおつしやつた。

八幡様で僕はかうおちかひした。

「僕らは、心を一つにして、からだを丈夫にし、勉強して日本の國をどんなことがあつても守ります。」

と。かへりにお父様が

「この戦争には、どうしても、かつてかちぬかねばならぬのだ。いつ、どんなことがあつても、へこたれずかたねばならぬ

い。それにはまづ神様に、おいのりし、みんなが心を一つにして、自分のしごとにせいを出し

必死のかくごで、戦はねばならないのだよ。」

とおつしやつた。

ラジオのニュースできくと、我軍は、敵の軍かんをうちしづめたり、飛行きをうち落したりしてゐる。そのたびに僕はよろこんでゐる。だがゆだんは、きんもつだ。いつどこから、敵が来るかわからない。

この日米英戦争は、あと十年、二十年續くかわからない。僕はどんなに困ることがあつてもがまんをし、けんやくをして、この戦には、どんなことがあつてもかたねばならぬのだ。

をぢさんの出征

三年生 坂本 伸彌

私の家には、去年の十二月から、

をぢさんがおいでになつてゐました。ろを、つくつてゐるころでした。

おかあさんの弟で、いつも私たれいがきました。

ちをかはいがつて下さいました。をぢさんは、とびあがつてよろちようと、私たちがゐるもんぶくこびました。

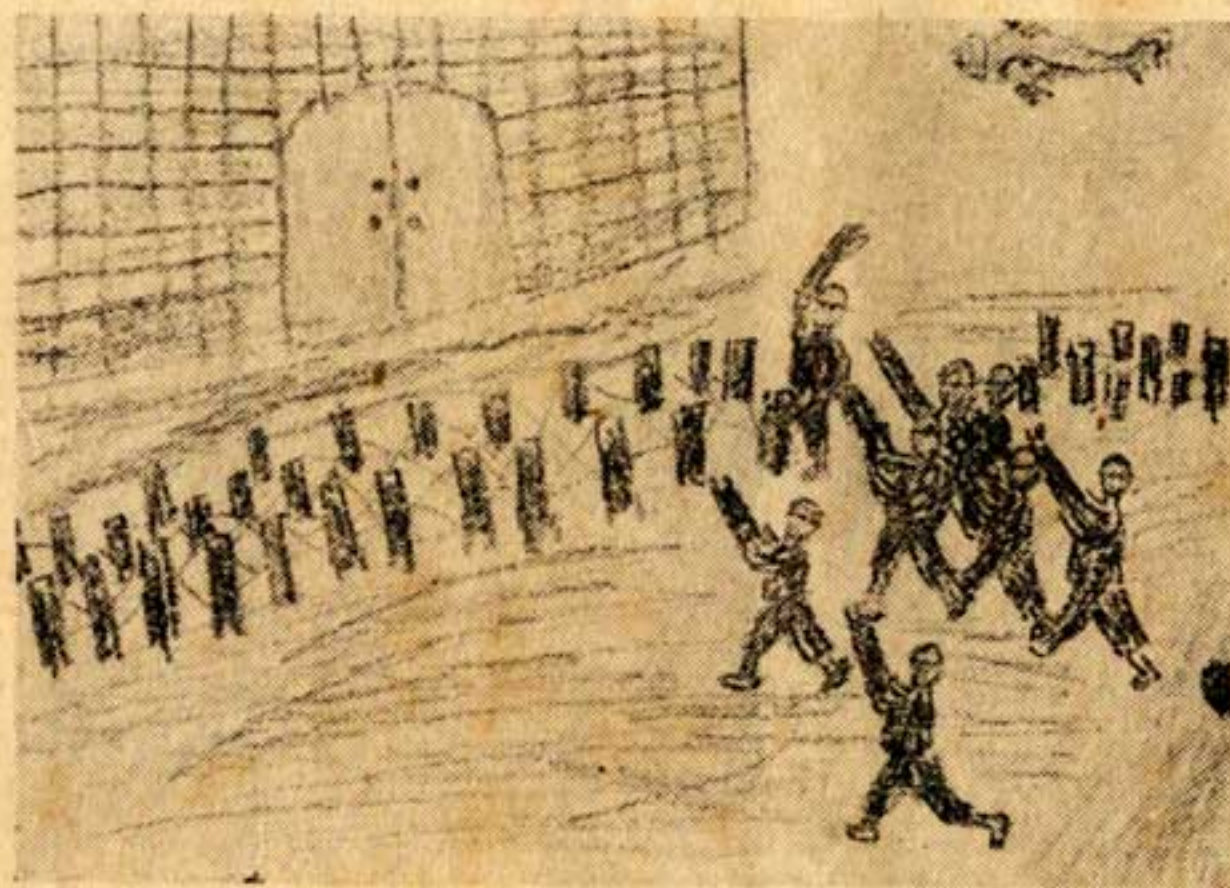
おかあさんは、ち

よつとかほ色をかへて、だまつてゐらつしやいましたが、いよく／＼ごほうかうができますね、とおつしやいました。

そして、赤い紙を、神様におそなへして、はいれいをなさいました。

をぢさんも、おがみました。

私は、をぢさんが、急に、とても、えらい人になられたやう

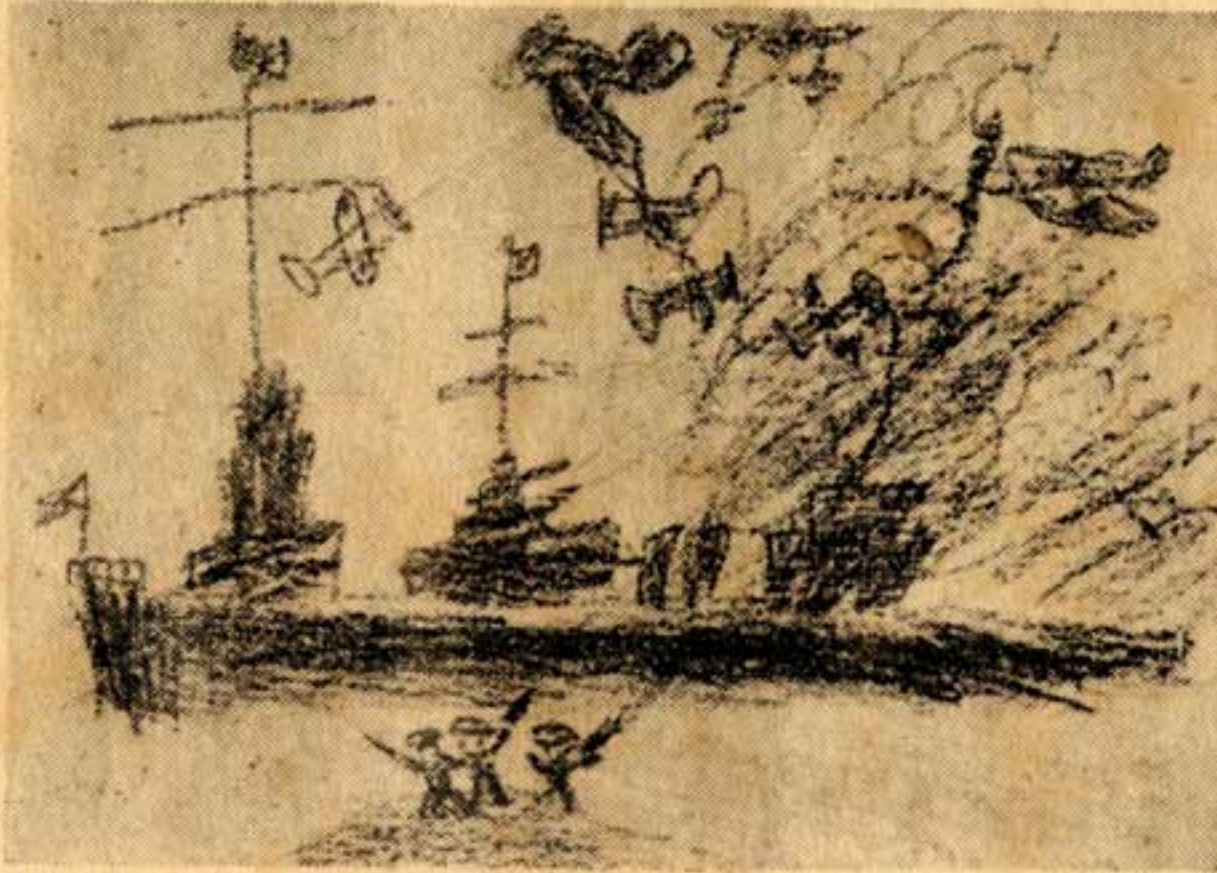


一年生 北爪 督久

におもひました。をぢさんは、すぐそこやへおいでになりました。しばらくしてから、きれいな、ぼうずになつて、にこ／＼して、かへつていらつしやいました。

それから、うち中で赤ごはんをい
たゞいてお祝ひしました。おかあ
さんは、兵隊さんになると、赤ご
はんはたべられないかもしれない
から、たくさん、おあがり。とい

はれました。
をぢさんは、にこ／＼してうな
づきました。
私は少しかはいそうに思ひまし
た。
そのばん、をぢさんが、東京え
きから大阪のおうちへおかへり
になりました。おかあさんもいつし
よに、いらつしやいました。私た
ちはみんな、やなぎ町までおみ
おくりしました。
バスをまつてゐるとき、みんな、
おとうさんやおかあさんの、いひ
つけをよくまもつて、よくべんき
ようをして、りつばな、人になら
なくてははいけません、とおつしや
いました。
私はなみだが出て、おへんちが
できませんでした。
ちよつと、向かふを見ると、こ
つちをのらはら先生が見てゐらつ



— 僕 —
た ち の か く こ
いひました。
をぢさんは、ちよ
つと、はづかしさう
にくびを、すくめて、
ゐましたが、けつし
んをしたらしく、し
せいをただして、「さ
あかいてごらん。」と
おつしやいました。
私とおねえさん
は、いつしやうけん
めいにかきました。

一年生 三宅道郎

しやいました。私は、はづかしく
なりました。

今でもとき／＼書用紙をだし
て、をぢさんのお顔を見ます。
うんと、おてがらをたてゝかへ
ればいゝなあ、とおもひました。
私はをぢさんにおてがみをたく
さんあげて、おやくそくし
ましたから、いつもおだしします。
をぢさんも、きつとおへんじを
下さいます。

私は、赤きさまの、神社さんば
いの時いつも、をぢさんのことを
おいのりします。

米英に宣戦布告

五年生 赤石 定次

十二月八日に日米英戦争が始ま
つた。其の日僕はかせをひいて寝
て居たが其のことを知つたのは十

時頃だつた。僕は其の時びっくりした。いよいよ始まつたなと思つた。それからしばらくして「ハワイ・マレー其の他をばくげきした。」といふニュースを聞いた時は、ずい分早いなあと思つた。又、とてもゆくわいだつた。

ハワイ爆撃、シンガポール攻撃、マレー半島奇襲上陸、香港攻撃開始等とても痛快な記事ばかりだつた。けれども、もつとく痛快だつたのは九時のニュースの戦果發表だつた。ハワイ空襲の時の戦果、戦艦二隻轟沈、四隻大破、大型巡洋艦四隻大破他に航空母艦一隻撃沈したが確實でないさうだ。グワム島空襲の時に軍艦ベングンを撃沈したさうだ。これを聞いた僕はベングインといふ名前がかしいの
で思はず笑つた。他に敵國商船を捕かくした物が多數ださうだ。最

後に「本日、全作戦において我が艦艇に損害なし。」といふのを聞いて「あゝよかつた。」と思つた。此のニュースはとても痛快だけではない。「日本軍はとても強いなあ。」とおどろかされた。

アメリカやイギリスでもとてもびっくりしたらう。ことにルーズベルトやチャーチルはどんな顔をしたらう。と考へたらおかしくなつて來た。

翌日も續々と戦勝のニュースがはいつたが昨日程ではなかつた。

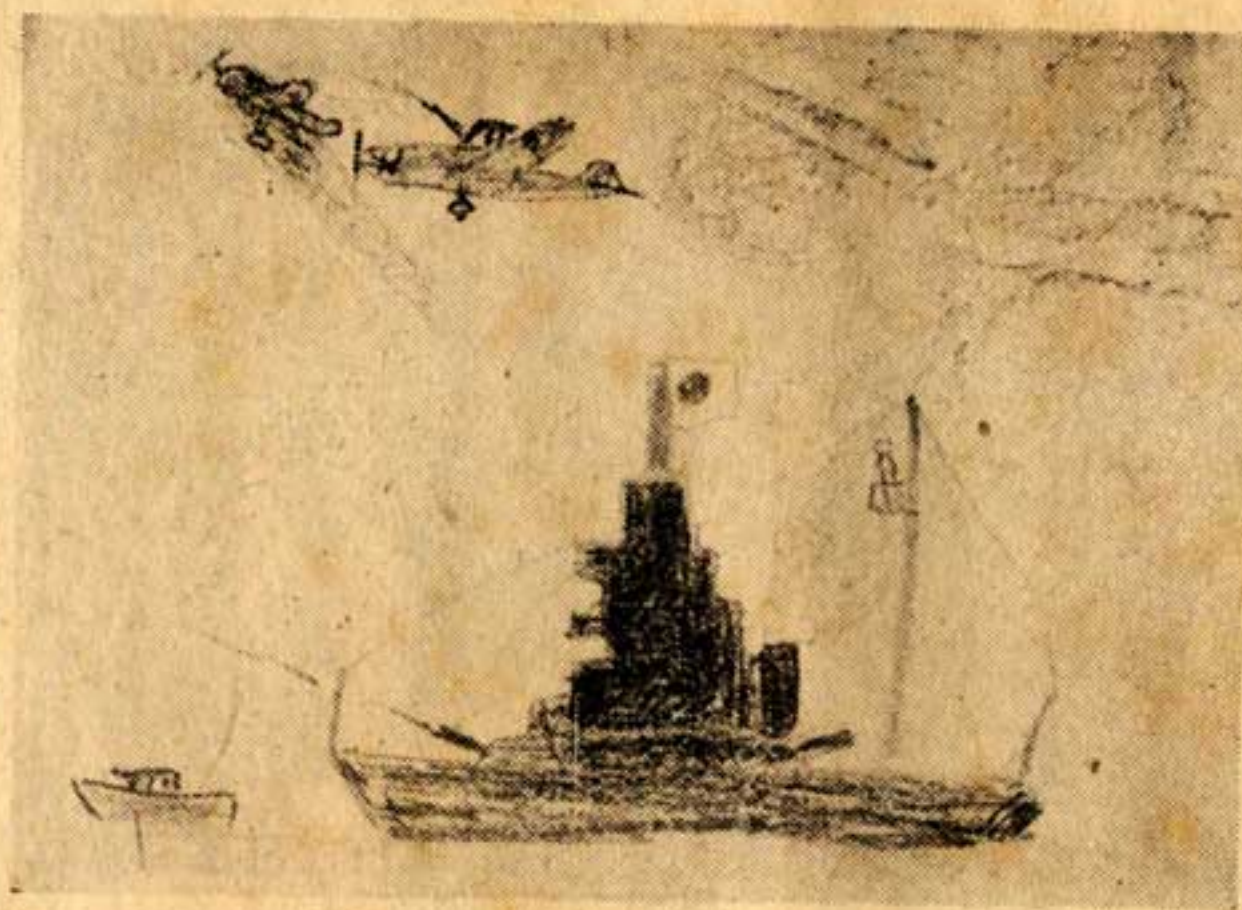
敵機もちつとも來ない。これは昨日我が軍がフイリツピン

で九十六機をやつつけたからだらう。それに敵はさんぐにやられてこちらへ來ることも出來ないだらう。長期戦になれば來るかも知れないが今年一ぱいはやつて來る

ことが出來なくなるかもしれない。

所が又昨日は非常な大戦果があつた。それはシンガポールに居る英艦隊の旗艦プリンス・オブ・ウェルス號が撃沈されたニュースだつた。

其の時戦艦レバルスも轟沈したのだ。これをニュースで聞いた時僕は飛上つてよろこんだ。お兄様はとなりの部屋まですべりこんで喜んだ。今月初めにシンガポールへ來た時これをやつつけてやりたいものだとか家で話合つて居たのがわづか十日で沈んでしまつたからだ。ニュースでもくはしく言つたし新聞にも大きく出た。學校でも其の話でもちきりだつた。すごい大戦果だ。又、我が海軍のばくげきもすごいものだ。撃沈させた飛行機の乗組員はともうれし



いだらう。イギリスやアメリカはどんなにさんねんだらうかなあと思つた。丁度日本で陸奥をやられたら、と同じかもしれない。

戦は今日で四日目だ。今まで勝つてゐても長期戦になるとゆだんは出来ない。戦はこれからが大事だ。ゆだんしてはいけないと今朝朝禮の時に渡邊先生がおつしやつた。

勝つてかぶとのをしめよ、とは此のことだと思つた。僕達もゆだんをしないでしつかりやらうと思つた。いつまでかゝつてもどんなに苦しくても日本を勝たせなければならぬ。歴史でならふのではなくて本物をきくことが出来る時、うまれて居て全く運がいゝと思つた。

強き誓ひ

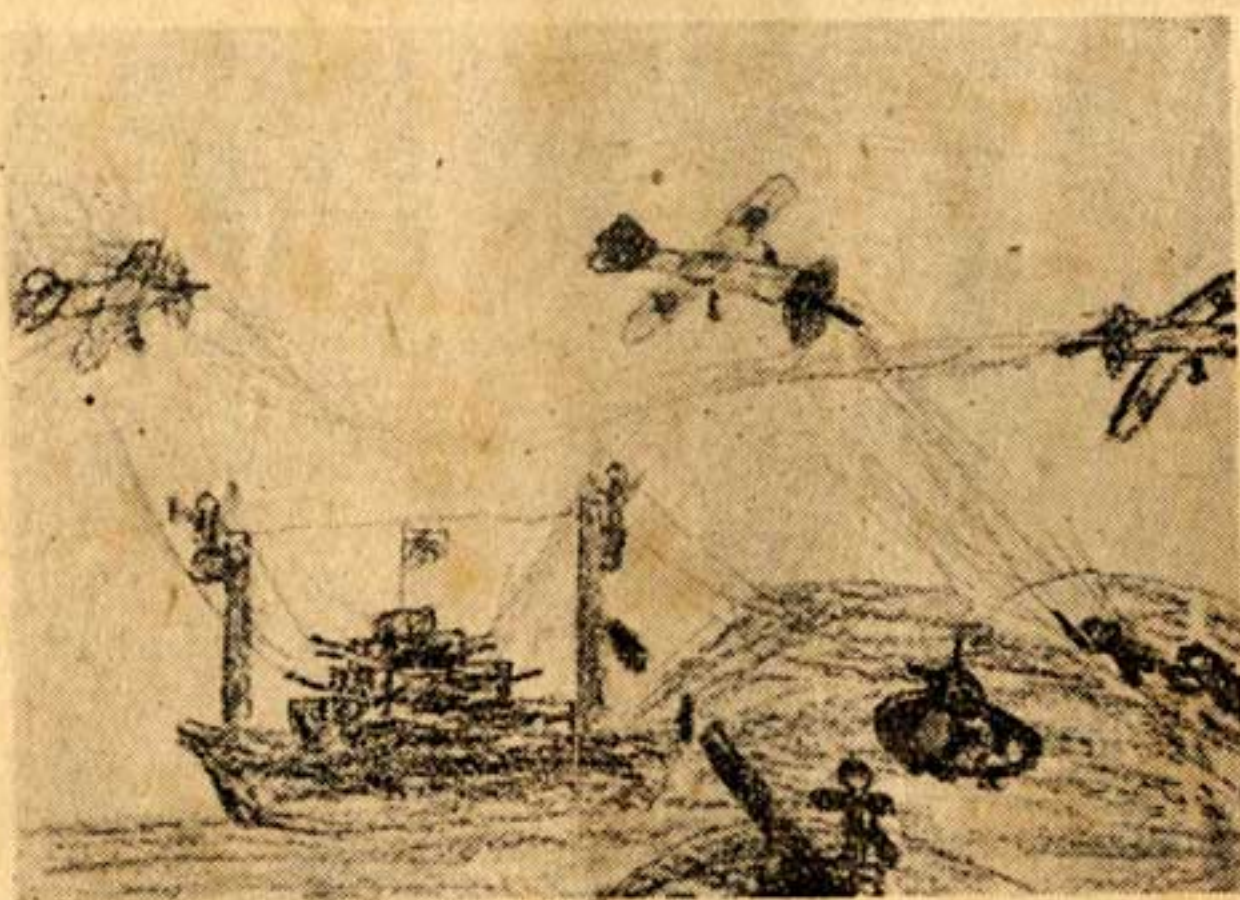
六年生 渡邊 由子

八日の曉「我が陸海軍米英と開戦」とラジオの放送が全國に響き渡りました。帝都の空は皇軍の首途を祝ふやうに雲一つなく、くつきりと晴渡つて居りました。昨日にかはる今日の有様と同時に胸おどる日本民族の喜び。私の心にも何か強くきざみつけられるものがあります。帝國の勘忍袋の緒も今こゝに切られ、お金や、武器や、品物で重慶政府を助け、不法な行爲を無數に働いた米國英國の兩國を相手にして戦ふこととなつたのです。東亞の平和を亂す國と戦ふことになつたのです。

英米と言つても何の恐れる所はありません。我が國に盡忠報國の誇るべき大精神がある限り勝利は、常に御稜威の下にあると私は

深く信じて居ります。宣戦布告の詔勅を拜して早くも三日は過ぎましたが、そのわづかな間の陸海軍のりつばな戦果を思ひ浮べるとその感謝と精銳なる決死の戦とに

緊張の中にも、私の小さい心には轟く萬歳の歡聲が湧き立ちます。この國難を突破するには、我小國民が光輝ある祖國の歴史をきづつけぬやうにすると共にのび行く日本建設を目指し、



一年生 田中 稔

今この時こそ一死報國の決意を固めなければなりません。さあ戦争はこれからだ。私達は紙一きれ、鉛筆一本でもむだにせず、一日一錢づつでも貯金しませう。「ちりは積りて山をなす」と言ふ言葉があります。私は一身一家を忘れ大君の御ため、皇國のために、命を捧げる、國の尊い寶の兵隊さん

に負けずおとらず、大國難を乗り切らなければならぬとつく／＼思ひます。固く／＼定つた覺悟のもとに握りしめたこぶしをかゝげ大進軍しようと思ひます。「しつかりやるぞ」と朝風にひらめく日の丸を澄みきつた青空に見上げながら強く／＼ちかひました。

ハワイ海戦大勝利

五年生 太田 善策

昭和十六年もゆかんとする此の十二月八日。突如歴史的日米對戦の火ぶたは切つて落された。落着かない氣持で學校へ登校した。學校では日米戦争の話でもちきりである。あゝ、日本はこらへにこらへて來たけれども、つひにふんぜんと立つたのだ。さうだ僕達が待ちに待つた此の戦争がつひに來た

のだな、と思つた。作業をしてゐると先生が、「上海にゐた敵の軍艦を一せき沈め、一せきをふんどつた。」

とおつしやつた、「わあ。」皆はをどり上つて喜んだ。僕も全身の血のわき上るのをおぼえた。そうして、三國への大きなほこりを感じた。晝休に職員室へ行くと、先生方はラジオの前に寄集つてゐる。世界地圖がある。地球儀がある。じつと耳をすますと、對戦の詔書が下されたのである。あゝ、さぞ英米では、驚いた事であらう。僕は痛快でたまらなかつた。次々に發表される戦果。ドイツにも勝る電撃戦。僕等小國民の胸。日本民族の胸。今頃は皆わき上つてゐるであらう。さうして、此の勢で國初つて以來の國難突破に僕等も、大人にも勝る勵をしたい。空

しうが何だ。英米が何だ。僕達の國民の力でふつとばしてしまふ、と友達にちかつた。

僕等のかくご

四年生 野吾健一郎

今ぞ日・米英戦争のひふたがきつておとされた。この戦争こそ我が國にとつては重大な戦争である。日本海軍はうでがなつて居るのでこん度の戦争では大勝利。僕達の國民學校では戦争がはじまつた日校庭でみんなあつまつてニュースを聞いた。そのニュースを聞く度にどの先生もどの友達もにこにこ顔だ。僕も嬉しくてたまらない。僕は其の時心の中であかつた。『よしきつと勝つあくまで勝つ。僕も戦時の子供だ。よしくるなら

來い。僕はこれから働くぞ敵になんてまけてたまるか。』とちかつた。僕はそれを實かうして居る。

戦争が長びくと先生から聞いた。僕達はたとひ紙一枚でも一銭でもけんやくしなければならぬ。それが銃後の守りである。僕はもつと／＼體をぢやうぶにし、勉強もし又おつかひやおてつだひをするのを遊びと思つてやればまちがひない。いつ日本の空に敵の飛行機が來てばくだんをおとすかわからない。だからゆだんは大敵だ。よく日々の仕事を反省してみて良い所はどんどんやり悪いところはやめるやうにし、なんでも物をせつやくし兵隊さんが心配しないやうにたまやそのた兵器をつくるのが第一である。僕も大きくなつたら軍人になつてお國のためにつくしたいと思ふ。

小説

客

齋



一 瀬 直 行

鈴 木 金 平 畫

庄太の新婚生活にも一年の月日は流れ去つた。

二人にとつてこの一年間は短い。夢のやうに短い。が、庄太より妻の春子の方が、女らしいものの見方から、早くも現實に尻を据ゑて、云はゞこれが夫婦生活と云ふもの、さうさういつまでも何かに甘つたれ、何かに酔つばらつてばかりはゐられないと、そこは年があけて二十八になる彼女の、早くから一人だちで世の辛酸をなめて來た彼女の心組が、美酒からさめるのも早かつた。

ところが、庄太となると春子より五つも年

長でありながら、やうやく知つた青春の夢に溺れ、今日も尙うつらうつらと新婚を楽しんでゐた。毎日のくらしに美しい虹の橋をかけ、ひそかに喜びとし、生活の歌をばうたつてゐた。

夫婦のくらしはつましい安月給とり、そして二人とも世間風に云へば、相當こすつからい方だし、何かにうかされたり誰かされたりして、損をするやうなことのない、その點よくも似たものの夫婦だつた。が、男より女の方がその點かしこいとすれば、矢張庄太の方がどこかちよろかつた。

云はゞ今日二人ともお互の體つきの癖までよく呑み込んで、もうこれ以上には相手から何にも出て來ない。いくら立ち入つてみたところが、新婚當時のやうな、まだ何かあると云ふ夢見心地が、すつかりはがされ、あるものは眼の前の、これがすべてで、も早や男は女の、女は男の、胸たかなる神祕もくそもあつたものではない。となると、一年たつた今日、春子は又違つた春子となつて、以前に輪をかけて生活を出直していつた。

庄太も春子も身内のない、又親戚とてない云はゞ孤獨な境涯、その點よく二人の生立ち

が似てゐた。さうしたあたゝかみから遠さか

つて、却つて世間の冷たさに、いやと云ふ程

身をもつて感じて來た。

春子は女學校を途中で退

くと、直ぐ銀座のある會社

に女事務員となり、十年近

くも勤めてしまつた。その

間いくたりか同僚の新顔を

迎へ、いつの間にか彼女達

は嫁入つて、又送り出すと

云ふ風に、春子はとり殘さ

れたやうに社内の古顔とな

つた。それでも人知れぬは

かなさを胸にひめながら、

せつせつと働いてゐた。

庄太は亡父の残していつ

た學費を叔父が預り、それ

によつてどうやら私立專門

學校を出るだけは出た。勿

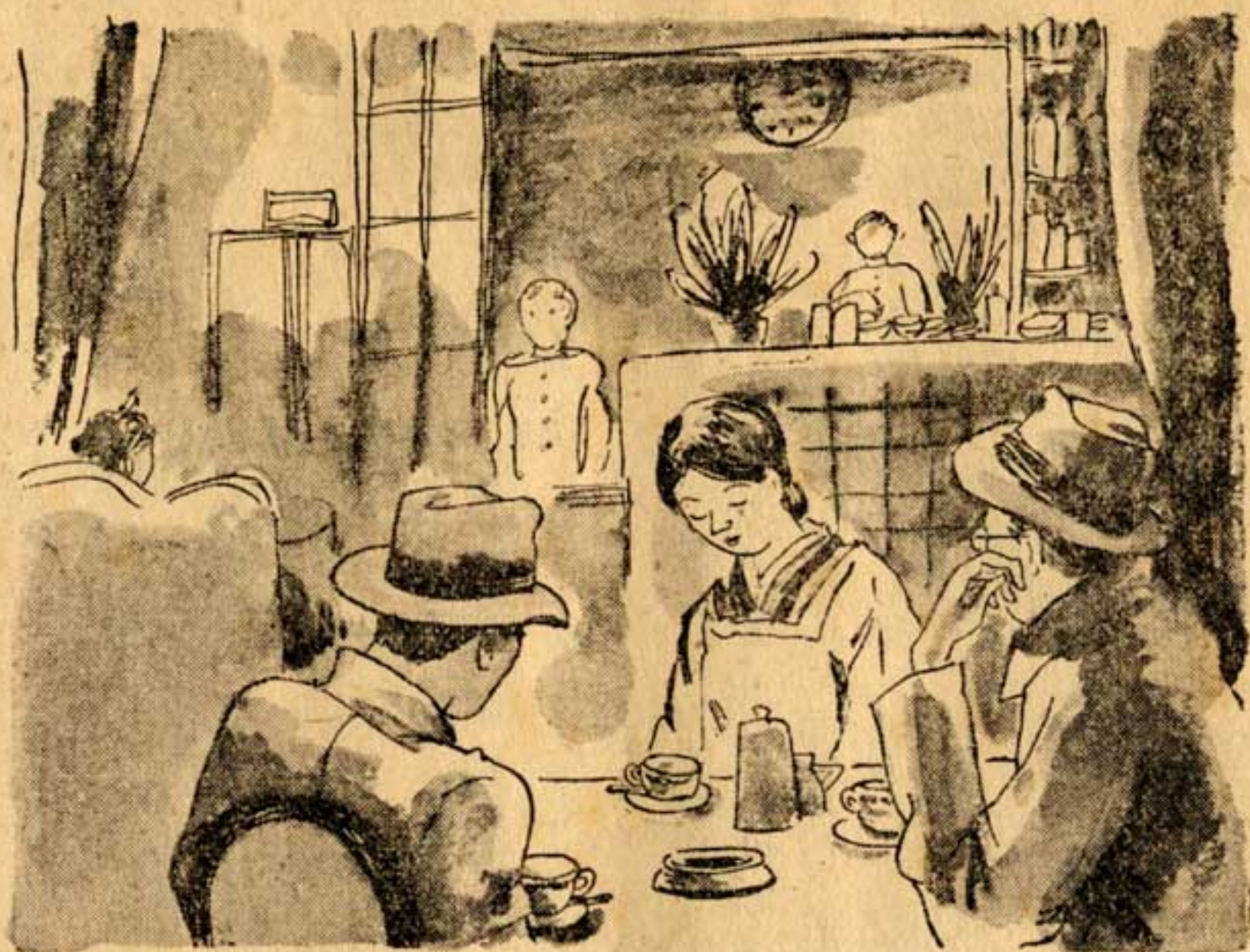
論ひどい貧乏學生で通し

た。やがて小さな無盡會社

に職を得、今日まで何のと

がもなくこつこつと勤め上げた。會社からは毒にも藥にもならない、取得と云へばそれが彼の取得、使ひやうによつては役にも立つ、そうみられてゐた。元來油斷も隙もならない庄太であつたが、何よりくびになるのがおそろしい。するいが臆病な彼は勤めだけはかたくしてゐた。

あの日、同じ机の同僚が、こんな娘があるがどうかと、彼に嫁をすゝめた。性來吝嗇な庄太が、この年まで獨身であるのも、根はそこにあつた。が、何としても、人なかへ出てもうらぶれた自身の姿がなさけなく、それにもうこれ以上にひとり身のやるせなさを、自分にもごまかしやうが付かなくなつた。それに今日彼相應の時へも出來た。ふらふらと同僚の甘い言葉にのつて、さて云はれる儘、銀座の電車通りに向いたテーブルで、熱いコーヒーをすゝりながら、生れて初めての見合をすませた。それまでと云ふもの、金こそ彼の生涯であつても、とんと女を知らない彼は、その場で、すつかりどぎまぎしてしまつて、



相手の顔をまともに見ることも出来ず、變にもぞもぞ身をかたくして、ちやんと揃へた相手の膝の上の白い手がやたらに胸にやき付いて、一言も口を交はさないで終つた。一人呑み込んだ同僚は省線の驛まで彼を送つて来て、「氣に入つたらしいね」と脊を叩き、「あれで、相當にため込んでゐるんだ。若い娘に似合はず眞面目でよく働く。いまだきめづらしい女だ」と、あとの言葉にいやに力を入れて語つた。それは春子の婚期を逸し、器量も器量なので、それに日頃の庄太を知つて、そんなことをまで持ち出してゐた。

さて明日は結婚してから丁度一年目、記念の日を前にして、うそ寒い部屋に二人は、これも節約したうす暗い電燈の上で、これ又節約した小さな瀬戸火鉢にたつた一つの炭團をほじくりながら顔を見合はせ、どつちも抑へきれない満足の微笑を隠しつゝ、先づ春子が「やつぱりあんたもさうだつたの。わたしもそのことが一番苦の種になつてゐたのよ」と云つた。

「どつちもそれまでは全くわからないんだからね。それが夫婦となつて、同じ家を持ち……」

あとは恐らく人には通じない「うふうふ」と云ふ含み笑ひをし、一層眼を細めた庄太は、「だらしない女は世間にいくらでもゐる。女のだらしないのときたら……」

そこで急に眞顔になつて、さて感慨深げに「全く運がよかつたのだ」と付けたした。

「わたしだつて、しまりのない男の人を、會社などでよく見て知つてゐるが、もしかしてあんな風な夫であつたらと、どんな思ひでゐたことか。でも不思議ねえ」と、全くもつて夫婦は世にも不思議な眼を見合つた。どうやら二人は、これで得難い大きな安心をお互に握んだかのやうに見えた。

夜のふけるのも忘れてゐた二人は、やがて夫婦の床に入つたが、容易に寝付かれない。お互に、「まだ起きてゐるのか」とさゝやき合つては、將來の生活の設計を繰返し楽しんだ。それはあゝして、かうしてと、きりつめる上

にも、日常をきりつめて、たゞ總ては蓄財の一事にかゝつてゐた。掘れば掘る程、尙底は出て来る。その又底をえぐりとることに、いぶかしい血は燃えた。

階下の時計が三時を打ち、萬事は又明日のこと、さうした一途の希望を時の流れにまかせて、どうやら見はてぬ夢路をたどつた。その晩をひと境に、二つのものは一つにとけて、どうやらこれまでより夫婦は夫婦として一段と深まつたやうだ。

世の中に金で解決の付かない事柄は一つもない。實際には金をもつてもわりきれない事柄は多過ぎる位多い。さうした場合でも一應は金によつてきまりを付ける。そして尙殘された問題があるとすれば、弱い方の泣き寝入りとなつて、ことはすむ。それが自分達の住む世間と云ふものではないか。もつともつと高い理屈の世界は庄太のやうな人間には、どうだつてよい。そんなことが彼を喰はしてくれない。暇と金のありあまる人種にまかせておけばよい。その日その日に追はれながら

くらしてゐる者には、閑人の寢言に過ぎない。先づ金だ、そして金よりほかに大きな、強い生きた力はこの世に存在しない。さう日頃庄太は考へ、いよいよ満足を得てゐた。その考へにかなしばりとなつて、總てのことがそこから出發し、又そこへもどつて来る。將來の希望も、生きがへさへも、その一事にかゝつてゐた。

春子もこれまで同じ歩調をとつて來、彼によつて同化されたと云ふのではなく、偶然にも同じものを持つちよつて、一つとなり、そこに似た者夫婦が出來上つた。が、彼女は女らしい考へから、その理由はもつと狭い。もつと低い。手近な日常の安易な所か



ら拾ひ上げて、その一點にこりかたまつた。

そのためか、却つて利殖にかけては庄太より腕がよかつた。

庄太はおかしな位、生活力と云ふか、元來自分の抱く力に自信がなかつた。どうあがき廻つても、どうせ大した人間にはなれつことなと云ふあきらめが常に付いて廻つた。それは彼の時の流れにうといせいもあらう。又その頃の、働き盛りに力一ぱい動くことの出来ない世の中にめぐり合はせたためもあらう。兎も角世間からひどく己を卑下してゐた。そこにかたくなにくらしながら、反面負けん氣は又人一倍に強かつた。そして見出したのが、この道、蓄財の鬼、守銭奴となつた。それによつて人にも勝ち、世にも勝つ、一生をかけての彼の道だつた。

どこの屋根も眞白に霜がおりた。凍て付いた郊外の道を、庄太は朝風に兩手をちぢかませ、鼻の頭を赤くしながら、省線の驛までを歩く。それによつて往復のバス代を稼いでゐた。一と月や二た月の儉約なら大したことにもならないが、これを十年二十年と數へると

相當の金額になる。それを毎朝樂しさに計算しながらとつと勇んで歩く。

どこの省線の驛も、さうした通勤者の群で毎朝われかへつてゐる。四方から集つて来る彼のやうな薄給者の背には、あざやかに五十圓とか、六十圓とか、月々のくらしが書き出されてゐる。そしてお互に電車一つ乗るにもおくれをとるまいとして押し合ひへし合ひして先きを争ふ。庄太の姿も、その標本みたいに、洋服は色ざめ、帽子は皺より、靴はばくばくに、小さなかばんを大切さうに小わきに抱へ込み、前方に背をまるめ込んで、どこからみてもみすぼらしい。

が、然し彼はさうした人込み、たとへば電車の中や同僚の集りの中にあつて、常に心のほこりを持つてゐた。ひそかに北奥笑んでゐた。このみすぼらしい連中には、いくらくやしなくても、到底庄太の眞似は出来ないであらう。が、表面はどこまでも、彼等と同列に、いやそれよりひどい不運續きを嘆いてみせ、同情をよぶことに骨折つてゐた。その底では

常にふてぶてしく、ざまをみると、勝ちほこつた性根がかげにふんぞりかへつてゐた。

庄太には危い橋は渡れない。石橋を叩いて、それでも安心が出来ないで、もう一度前方を見直してから渡る。だから月々の身の皮をはいで残した金を、もつともたしかな、もつとも有利な方法で預けておく。何かに金を投じ、それによつて儲けると云ふやうな藝は、おそろしくて出来ない。又そんな氣のきいた才はなかつた。今年は去年よりこれだけふくらんだと、その計算を唯一の楽しみにしてゐた。

ところが春子となると、少々病も深くなつて、この頃では、先づ金高を愛すること同じであつたが、それだけに満足しないで、札や錢をあたくさい生き物のやうに、肌に触れる喜びを抱くやうになつた。又錢は錢で、札は札で、數へる度に味の變る不思議さを楽しむやうになつた。それを知つた彼は、
「金と云ふものは、常に生きてゐる。さうしてゐたんでは、せつかくの生きものも死んで

しまふ」と、金が金を生む喜びを説いた。さうして彼女の掌の上に金を遊ばしておいたのでは、刻々時の流れと共に、息をふきかへしてゆく金が死んだも同様である。あげくは眞剣な夫婦争ひとなるが、二人とも妙に嬉しさうにしていがみ合ふ。

「何か、まだまだこの上きりつめる方法がありはしないか」

お互にさう云つて顔を見合はしては、あれも無駄である。これも無駄であると、日常生活費を更にきりきざんでいつた。實際には無駄どころか、なくてはならぬものまで省く。

それでも彼等にはまだ無駄が眼に付く。

結婚した當座、郊外の、不便なために家賃のやすい二階家へ住み込んだ。その頃住宅難からひどい借家の拂底をよいことに、階下を人にかした。そして二階にうつゝてみたものの、若夫婦二人に二間は廣い。そこで奥の北向きの三疊に自分達は引込み、表側の六疊をこれ又人にかした。さうなると、この家をただでつかつて、まだおつりが來た。

そればかりか、一家三世帯となつて相當にぎやかとなつたが、先づいづれかの新聞をかりて讀み、やれ炭だとか、砂糖だとか、米だとか、ついうつかりしてゐたものだからととほけながらかりて来る。三度に二度はいやな顔をされるが、そんなことで引込む夫婦ではない。それにさうした時の春子は、特有の愛嬌と口達者をもつて、それと知りながら相手もだまされてしまふ。

客齋のために、庄太は煙草も酒もやらない。そして社内で何とか口をきかれても、平氣で人並の交際はしないし、出錢となると口を緘して横を向いた。そして上役の尻にくついて歩いては御馳走にありつく。上役の機嫌をとりながら、自分をひどく哀れなものにし、相手からの罵倒に卑屈な笑顔をみせ、何とかはなれまいと喰ひ付いてゐた。

いつたいそんなにして、これまでにどれ位の貯へが出来たのであらうか。おそらく種をあかしてみれば、ふき出したくなる程のものであらう。この頃の俄かに金の出来た連中の

一夜の遊びにも追ひ付けないに相違ない。が庄太夫婦にとつては、總てをいさぎよく投げ捨て、そして得た一事、今日も明日もそこに結ばれ、二人は必死に喰ひさがつてゐた。ある日、庄太は空腹を抱へ、おそく歸つて來たら、いやにもの思ひに洗んだ春子の顔色まで悪い。どうしたのかと、やさしくたづねてみたが、下を向いたきり彼女は強情に口をあかない。こんな眞似はしたことがないが、彼はそつと妻の肩に手をあて、さとすやうに尙もたづねてみたら、

吉田 絃二郎 著

江戸最後の日

定價 一・八〇
一〇

「江戸最後の日」「飯塚部隊長」
その他脚本數種

第一書房發行

麹町區一番町

振替東京六四二二三

「……」

ふと一瞬庄太は仰天した。自分でもどうしたらよいのかに迷ひ、いささかその場に芝居がかつて、ちつと顔を見合はせてしまつた。いつたい夫婦は喜んでゐるのであらうか、悲しんでゐるのであらうか。何やらこの狭い部屋、その儘深い深い水底に沈んでゆくやうな、ちよつと誰の眼にも解きかねた。

それにしても夫婦に子供の付きものであることを、とんと忘れてゐたとは迂闊も甚だし。あきれかへつた誤算を犯してゐた。

小橋 麟瑞 著

法然上人十徳頌

四六判 百十五頁
定價 二十錢
送料 三錢

取扱所

法然上人鑽仰會

芝區芝公園明照會館

振替東京八二一八七

戦ひ抜かう 大東亞戦

漫画協団作

僕等の決戦體制

山崎善一

「おちさん、通りよくなつたるホラ……」



超非常時節分

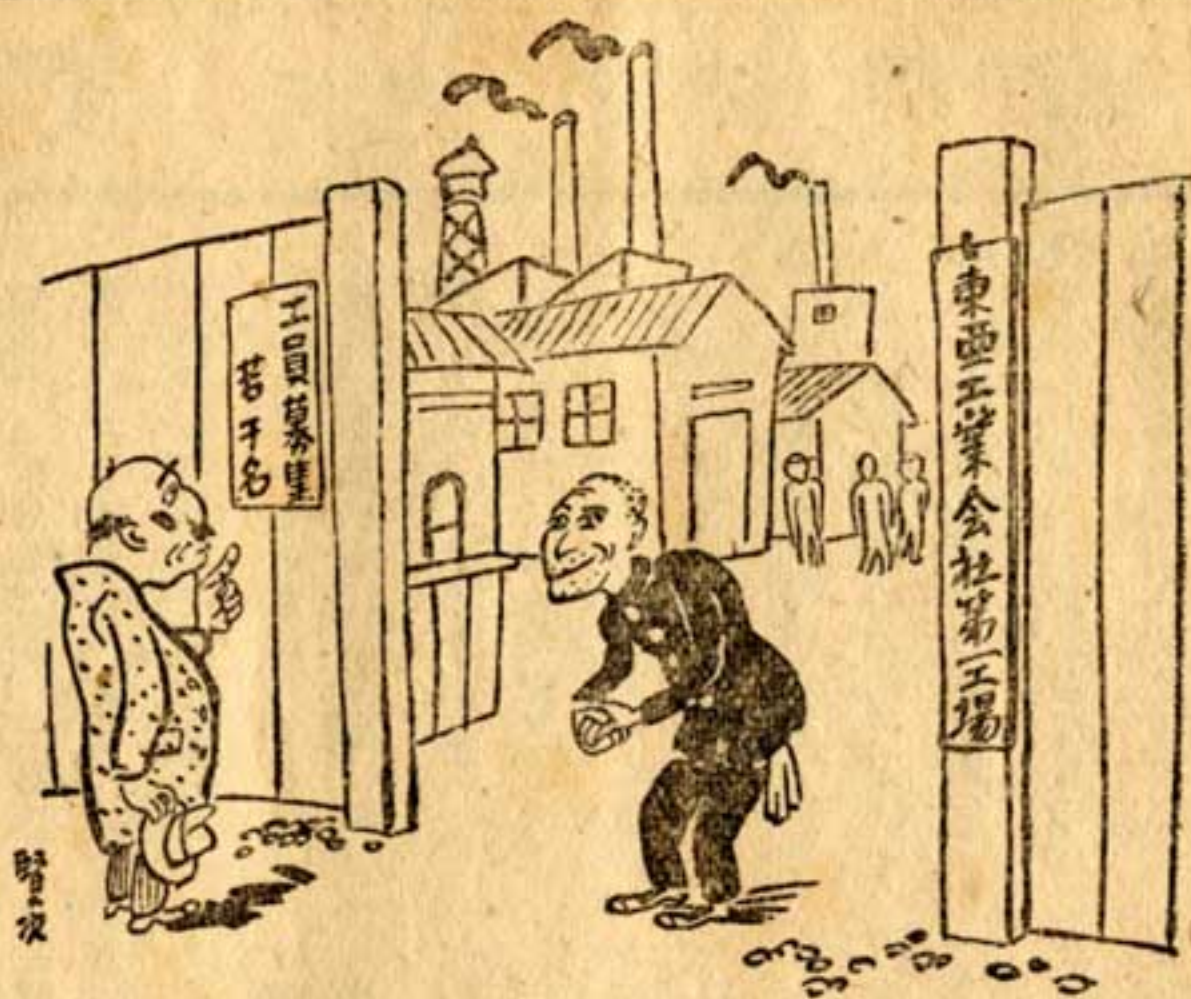
「トホッ豆まきも變つたナア」

をぎ原賢次



「わしを使つてくれ」
「アツ社長ご冗談を……」
「ホントだよ社長なぞ閑ばかりで勿體ないよし」
をぎ原賢次

有閑廢止!!



鐵獻納をした考古學者

山崎善一

「此の本一冊あれば何不自由無いわい」



信 仰 相 談 當 擔 中 村 辨 康

念佛は心か聲か

(問)

お念佛とは佛様を
念ずること、聲

を出して唱へなくとも、心の中
で念ずればよいと考へまし
て實行して居ますが、それで
宜しいのでせうか。或る人は
矢張聲を出して唱名しなくて
は駄目であると申されました
が、お念佛と唱名とに何か區
別があるのでせうか。(奈良・

吉野・大淀・大浦學倫)

(答)

念佛は字から申しま
すと「心で佛を念

ふ」ことですが、すべて心で念
ふときは自然に外の生活行爲に
出て来るものです。しかも、人
間生活の中で、一番簡単なもの
は言葉であり聲であります。私

達がいそ自分の氣持を表現する時、からだ全
體で現はすか、手や目を用ひてやるか、聲で

するか、その何れかを借りなければなりませ
ん。動物は昆虫でさへ音を出して相手に自分
を知らせて居りますし、獸類などは喜びや驚
きなどの時自然に聲を發します。ですから聲
は自然の發露であります。人間世界に於いて
は聲から言葉が出來、その言葉に依つて文化
が發達して來ました。言葉の數の少ない種族
はいまだに未開人であることを御考へ下さい
まし。學問にしても發明にしても、過去の人
々が見開いてそれを文學即ち言葉に托してあ
とに残して行つて呉ればこそ、それを土臺
にして更に進展させて居るのであり、それを
また言葉に依つて世界に發展しても居るので
す。軍隊に致しにしても「號令」と云ふ言葉
なくして戰略を實行することは出來ません。
聲は人類最大の財産です。之れほど大きな共

有財産はありません。ですから聲を無視して
はならないし、またこれを有効に使用しなけ
ればならないわけです。しかも聲は私達の心
を表現する方法として最も有効であり最も簡
易でもあります。無論佛教では「意業」と云

つて心の動きも人間行爲の一としては居りま
すが、それは身業口業の基礎的なものであり
身口の二業が心と表裏相應しない場合に問題
になるからです。表現としては身體か聲かそ
の兩方かの三通しかありません。例へばあな
たがいくら「親孝行」をしようと思つて居て
も「孝行」を心で念じて居るだけでは親孝行
したとは云へませんでせう。ですから佛を念
ずることも、身體で表現するか(禮拜とか供
養とかの)、または聲で表はすかでなければな
りませんし、その上私達は自分の心を一層確
かにする爲に、自分に聲で言ひ聞かせる場合
も應々にしてあるのであつて、法然上人が「聲
につきて決定往生の思ひをなすべし」と云は
れたことも、さう云ふ理由があるからであり
善導大師が「念聲是一」と云つたのも、言葉

信 仰 相 談

であり唱名は念佛であるとして居るのである。但し聲と云つても自分の耳に聞える

を發することに依つて一層念が確かになるからであります。例へば私が「茶碗」と云つたとき、その聲に應じて「茶碗」の姿や効用が心に浮ぶやうに、如來様のことに限らずすべては「念聲是一」であり「應聲即現」であります。ですから心で念つて居りさへすればよいと考へるのは、まだ考察が足りないものであつて、何んな宗教でも「聲」の表現のないものはありません。これは自然なのです。

次に念佛と唱名とに何か區別があるかと云ふお賀ねですが、念佛とは廣く云へば「南無佛」であり特定のには「南無阿彌陀佛」であつて、即ち「南無」することが「念佛」の念であります。唱名の方は「佛名を唱へる」とことで、即ち「南無阿彌陀佛」を聲に出すことです。強いて區別を云へばこんなことです。然し一般には一つに考へられ念佛は唱名

程度以上の聲を「大聲」と云つて居りますから「少聲」の方は自分の耳にも聞えない聲と云ふことになります。するとこれは聲帯に息を強くあてないで鼻の方へぬいて居ること

宗 派 對 立 及 び そ の 排 撃

(問)

太虛法師が來朝の折に「日本の宗教界は各種雜多なものがあ

また事實佛教界には相反對の立場をすら取る宗派が並立して居ますが、同じ佛教でもかうも違ふのはどう云ふわけでしょうか。これが佛教の弱體化の原因かとも思はれるが如何でせうか。また各宗派で自己の主義に忠實ならば他を絕對排撃して自己の主張を通すべきが、宗教本來の姿ではないでせうか。(東京・大森區・小畑善弘)

(答)

色々な宗教が混在して居るのは獨り日本ばかりではありませんが、我が國の特別性質として色々な文化要素を保

すから、外見では心で念つて居るのと大差ないかも知れませんが、然し「唱へる」と云ふ意志とその意志の働き即ち實行とがあるわけ

存するばかりでなく、それを進化せしめて居るところから、それが特に目立つのでありませう。それに他の民族では新しい文化がはいつて來ると、古い文化を何時しか忘れてしまつて顧みないのに、獨り我が國ではそれが幾分でも國家國民に役立つ時、決して之を見捨てなかつたのであります。その最も著しい例が神道と佛教との關係で、一方に神として祭られながら他方に佛としてもまつると云ふやうに、そこに何の矛盾した氣持もなく共に認容して居るのが現在の事實であります。また犢鼻褌と腰卷の如き、明らかにインドネシア民族のもですが、この神代時代に渡來した文化を幾千年となく維持して來たのであ

つて、決して之れを見捨てゝは居ないので
す。また佛教の分派は我が國ばかりでなく人
々の立場の相違から印度にも支那にも色々の
宗派があつたのですが、印度や支那は民衆の
上に思想の發展がなく、また保存力も弱かつ
たために、現に見るやうな状態になつたわけ
です。ところが保存力の強い我が國では、古
い支那渡來の佛教も、支那から持つて來てそ
れを日本的に直した佛教も、また純粹に日本
で發生した佛教も共に保存し發展せしめて現
に十三宗となつて居るわけです。然し均しく
佛教でありますから全く相反した立場を取つ
て居るものではありません。大きく分ければ
成佛主義と往生主義との二つになります
が、佛教には「三法印」と云ふ規範があつ
て、この三法印に相違するものは「非佛教」
として居りますから、何んなに分派して居て
も「三法印」と云ふ規範を守る以上、根本的
に相異つた性質ではないわけでありませう。佛
教は元來自容性に富んで居る爲に外部から異
つたものがかなり附隨して居ります。さうし

た附屬物を多く取り入れたものとそうでない
のとの相違があり、支那で發達した爲に支那
的思想の多分にはいつたものと、日本で發生
した爲に日本的性格を多分に持つて居るもの
と、それへ更に支那思想を加へたものとの相
違があるのは當然で、さう云つた特異點だけ
を取り上げると、自然異つたものとして特色
が際立つて來るのですが、三法印と云ふ規範
を握めば凡てが一致することも出来るわけ
ですから、根本的に反對の立場に立つ筈はあり
ません。三法印とは「諸行無常、諸法無我、
涅槃寂淨」のことで、ことに「無我」の立場
に立つ佛教各派が互ひに相抗争するなどは全
く間違ひであります。それは宗我を立てた
「有我見」であつて三法印に當てはまらない
「非佛教」に墮ちてしまつたことになるから
であります。日蓮宗の四箇格言とか、念佛と
題目との抗争とか云ふことも以前にあるには
ありましたが、段々訂正されて來たと思ひま
す。何事でも一から多に分岐しますが、やが
てまた多から一に歸納することになります。

現に五十六派が二十
七派に合流しました
が、將來もつと合流
されませう。仰る
とほり協力を要する時、このやうに分派して
居ては佛教の有する力が分散して弱體を露呈
するから、それがもつと深刻に反省される時
合流運動は自然強化されませうし、佛教各派
のもつ教義内容が、若しその中に日本的性格
と相容れないものがあれば、その點は必ず正
されませうし、また日本の性格と一致する
ものがあればもつと明確になるやうに強調さ
れませうから、段々お互ひに接近し合つてや
がては「日本佛教宗」と云つたやうな形にな
らぬとも限りませう。然しそれには相當の年
月と波瀾重疊とを経なければなりません。
次に「他を排撃して自己主張する」と云ふ
ことですが、これは前述したとほり、それで
は佛教たる根本規範に相違して、それ自體が
佛教的態度を失ふことになりますから、そん
なことは佛教本來の姿ではありません。それ



は日本民族自體の宗教觀念が高まれば自然に發展的解消をして亡ぶべきものは解消し、發展すべきものは發展して正しいものが残る筈ですから、目下「自分のみが正しい」と主張したとて、それは無駄な抗争です。將來の歴史がよりよき批判者として整理して呉れると思ひます。と云つて自然に亡びるのを待てと云ふのではありません。淨土教の如きは法然

大乘十來に就いて

十一月號本欄の「大乘十來」に就いて、靜岡縣の池谷宗觀と云ふ方から

大乘十來

富貴者自慈悲來

無病者自信心來

智惠者自精進來

福德者自善根來

愛敬者自忍辱來

高位者自禮拜來

短命者自殺生來

病身者自不淨來

貧窮者自慳貪來

愚盲者自破戒來

上人の採つた「選擇」即ち正中の正へと進む努力を今もなほなしつゝあるのであつて、日本的性格から眺めて淨土教義のもつ内容を層一層擴充することに努めて居ります。そして五十年百年の後に本當の光を遺憾なく發揮し得るであらうことを待望して居りますから幸ひに御休心願ひたいと存じます。

と云ふのを見たことがある。典據は知らぬが御參考までにお知らせすると、御親切な御報告がありました。慈悲、善根、信心、忍辱、精進、禮拜、不殺生、持戒、清淨、不慳貪の十種を上げて屬るところ、重複しても居り統一もないけれども、大乘教の徳目ではあります。然しその目的とする富貴、福德、無病、愛敬、智惠、高位、長命、無病身、不貧窮、不愚盲の十種はむしろ世俗的であつて、謂はば功利主義です。つまりは初學者への勸誡門

なのかも知れません。之に似たものに、長者の十徳と云ふのがあります。

一、姓貴、二、位高、三、大富、四、威猛、五、智深、六、年耆、七、行淨、八、禮備、九、上歎、十、下歸（法華文句第五）、また弟子の十徳と云ふのに

一、信心、二、種姓清淨、三、恭敬三寶、四、深慧嚴身、五、堪忍不懈倦、六、尸羅淨無缺、七、忍辱、八、非慳慳、九、勇健、十、堅行願（大日經疏）で、前の十來と似かよつたものがあるではありませんか。若し大乘十來が御報告のやうなことであることであるならばかう云つたものの合柔かも知れませんか。

信仰座談會を休みます

各方面の多大の御援助により催してゐました中村辨康先生を中心とする信仰座談會は、この程中村先生が御微恙にかゝられましたので、先生の御快癒の一日も早きことを希念して當分お休みと致します。

淨き友の會幹事





◇貴會の益々御發展の程心よりお祝ひ申し上げます。毎月の記事誠に有り難くお導き拜見いたしてゐます。ともすれば苦惱にまきこまれさうな私、お念佛にむち打たれてはゆらぐ自分の心に深く懺悔いたして日目を過させて頂いてゐます。諸先生方の御教へに掌を合せ泣く泣く御禮申し上げます。ことに吉田先生の餘りにも眞實なる御言葉にかたくなな胸にひししと迫つて参ります。吉田先生の尊いお姿、お導き下さいますおやさしいお心にひれ伏して幾度も幾度も拜讀させていたゞいてゐます。(田雲市今市區本町 井上吉代)

◇皇紀二千六百一年師走八日、夫は新しき地球の誕生日であり、世界が正にその面貌を變ふる第一日

であつて實に、皇祖神武天皇が大和に都を奠め給ひし日にも比すべき聖日であります。この日一億日本國民は豁然としてその本然の使命に目覺めたのであります。印度に生れた佛陀の教へが印度に育たず、支那に傳つて又榮えずひとり日本に東漸して一千四百年、あらゆる練成を経つつ分化發展して参つた所以のものは、歷朝の篤き御保護はもとよりながらわが華國の御精神と佛教の大理想とが間然する處なく一致してをつたが故である事を想へば佛教がその榮ゆる處を得たるも豈偶然ならずと思惟致されます。(横濱市鶴見區駒岡町 白石廣祐)

◇毎度御指導を深謝いたします。中村先生の直接の徒弟となりたく

存じますが、若しこれが許されるとしたなら如何いたしたら宜しいのでせうか。又若し出来ませんでしたら是非とも佛籍だけにでも入りたいと存じます。何卒右手續につき詳細お知らせ下さい。(栃木縣 烏山町 愛讀者)

◇紙面の都合によりしばらく柳壇を休載いたすとのことですが、柳壇は寸鐵の言を以て私をししばし教育して下された結構な讀物です。西島○丸先生の御熱心な御評に全く頭をさげてゐます。何んとか紙面を都合して柳壇を引續き連載して下さい。さすれば讀者として大きな喜びであります。大戦果ラジオで聞ける有難さ。(京都市東山區繩手通 永田七郎)

◇畏くも 昭和十六年十二月八日 漢發あらせられたる宣戰の詔書を拜し恐懼感激に堪へず茲に淨土宗檀信徒は 大御心を體し銃後國民の本分を守り報國の赤誠を永久に

堅持せんがため華頂報國念佛會を組織し左記事項の實行を期す。

一、銃後戰友三則——沈着冷靜、絶對服從、國防獻金の勵行を協調す。二、毎月二十三日華頂寺に集會し信行を策勵し以て皇軍の武運長久を祈願し併せて戦歿英靈の冥福を祈る。三、大東亞戦争必勝信念の昂揚を期し戦時生活を強化し以て大勝利の終決を見るまで各自毎月金一圓宛釀出し國防獻金を爲す。(平壤府 華頂報國念佛會)

◇聖戰大東亞戦争にあたり皆々さま銃後の守りに御専心遊ばされることゝ存じます。小生等も大東亞建設途上にある皇國のため無事御奉公させていたゞき、大死一番の努力を致すにつけても、現下確固不動の信念こそ大切と思ひますので、皆々様のこの上ともに御指導をお願いいたし、御健闘を至禱いたします。(天津日界明石街 安道 觀道)



家庭講座

時局と佛教

伊藤智源

去る十二月八日には畏くも我國民として忘れることの出来ない劃期的な宣戰の大詔を賜つたのである。今や家庭に在る者も、そうでない者も等しく一大覺悟を要すべき時が來た。從來とても覺悟を必要としなかつた譯ではないが此の大詔を拜することにより一億國民の情熱はいやが上にも高潮されたのである。これ迄は戰時であり乍ら何となく平和的な氣風もあつて本當の非常時と云ふ意識が徹底しなかつたが、今度こそは國民の氣持も徹底的に緊張し統一し最早生ぬるい氣持では居られなくなつたのである。我々一億同胞は本當に「火の玉」となつて此の聖戰を貫遂しなければならぬ。

佛教では周知の如く「諸の惡をなす勿れ、諸の善を奉行せよ」と教へてゐる。佛教は此れによつてみても明

である様に善を勧める宗教なのである。然し佛教の善は無我を特色とするもので我儘を封じてその意を淨くすることにある。此の吾が意を淨くする處に所謂三寶の精神があるのであるが、それは三寶即佛法僧が眞實の生活を根本とするからである。故に聖德太子の十七條憲法第二條には篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸萬國の極宗なり。何の世何の人か是の法を貫ばざる。人尤だ惡しきもの鮮し、能く教ふるをもて従ふ。其れ三寶に歸せずんば何を以てか枉れるを直さむ。

とある。邪曲を矯めるものが佛教であつてみれば今日の聖戰も佛教の目的に合致するもので、聖戰は全く英米諸國の非人道的態度に對する膺懲である。八紘一字の大精神は云ふまでもなく我國民の道德であり日本精神であるが是れ亦

佛教の精神と一致する所である。と云ふのは善の生活はど
 こまでも個人主義、自己中心主義ではなく人々が相和し相
 協力して恰も一家の如く全體の幸福を圖る所にあるからで
 ある。若し個人主義を善とする様な佛教であつたならそれ
 は我國には不用のものであり、今日迄存続發展することは
 出来なかつたであらう。元來或る教が後迄永く傳へられる
 と云ふことはそれが人の心によく合ふからのことである。
 魅力のない教なり思想なりは人が如何に之を存続發展せし
 めようとするも永い時間の経過中には完全に葬り去られる
 ものである。か様に考へて來るならば佛教も決して輕する
 ことは出来ず又か様な所から佛教は又國民精神であると云
 ふことが出来る。國民と佛教とを切り離さうとする今日の
 一二の運動、思潮の如きは全く此の事實を見誤り或は又此
 の事實を故意に無視せんとする惡意に出でたものとしか考
 へられない。佛教を排撃せんとすることは最早國民の良心
 が許さないものである。従つてまた佛教を奉ずる者が國に殉
 することは當然と云はねばならぬ。
 以上は佛教に云ふ善の生活からして日本精神延いては時
 局に對する心構を考へたのである。次に善の一つではある
 が忍の生活について一言したい。今日我々の生活に於て、

特に時局に關係して、忍の生活が一層必要なるを感ずる。
 元來忍の生活は東洋道德特に佛教道德として大切なもので
 ある。歐米人はどちらかと云へば本能的享樂的傾向が強
 い。アメリカ人が戦争を嫌ふのは何によるか、一に彼等の
 個人主義云ひ換へれば自己の物質的欲望を満足せしめ、現
 世生活に最大の價値を見出さうとしてゐるからである。従
 つて自己の最も愛する此の生命を否定する戦争の如きは思
 ひもよらぬ所である。東洋に於ても儒教の如きは餘り忍を
 説かない。儒教の常識である五倫五常をみても忍と云ふ文
 字は出て來ない。所が佛教になると明瞭に忍を説き忍辱は
 六波羅蜜の一である。佛教の道德は忍と云ふ一見消極的道
 徳が表面に表れてゐる所から積極性に乏しいかのやうにも
 思はれるが決してそうではない。忍は決して消極的のもの
 でなく忍んで大いに伸びんとする積極的道德である。我々
 が家庭に於て親子兄弟の共同生活を遂げるにも歐米の個人
 主義社會に於ては自己の我儘を通すことも出来ようが我が
 國の如く家族本意の社會にあつてはお互に譲る謙讓の徳が
 必要である、即ち忍の徳である。親も子も兄も弟も一家
 の爲にはお互に忍んで我儘に走らず一家睦じく行く所謂
 「和」の態度が必要となつて來る。和は即ち忍から生ず

る。此れを國家的に考へてみても今日國民各自がお互に忍の生活を發揮する所、そこに國家は磐石の安きを致すのである。國民各自が徒らに自己の口腹の満足に驅られ我欲を主張することゝなれば國家は自滅するの外ないのである。我々は飽くまで堅忍持久の精神で行かねばならぬが此の武士道的精神は全く佛教の忍の生活である。佛教ではこの忍を説くこと極めて深く

忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり。

と佛遺教經にも説かれてゐる。我々は忍苦の生活の好模範を釋尊の生活、法然上人の生活に見ねばならない。又一面英米の飽くなき我欲の生活が今次の大戦亂を惹起した事を思ひ此の我欲の生活を抑へるものは一に忍辱の徳であることを思はねばならない。こゝに思ひ起されることは徳川家康公の有名な遺訓

人の一生は重き荷を負ふて遠き路をゆくが如し。急ぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒は敵とおもへ。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば害其身に至る。おのれを責めて人を責むるな。及ばざるはすぎたるに勝れり。

である。家康公は佛教の信仰特に淨土宗の信仰が極めて厚く日課念佛六萬遍を唱へた程である。其れを通して此の訓を見ると如何にも此の全體が佛教道德忍の精神によつて貫かれて居る様に感ぜられる。幼少より遭遇した艱難辛苦の體驗が送り出でて此の言葉となつたとしても此れが佛教精神でない事を誰が保證し得よう。此の時局に當つて我々は再び此の遺訓を思ひ合す必要がある。

忍について述べることに以上の如くであるが此の忍も我が淨土門に於ては阿彌陀如來の信仰に基く自然のものである。み佛に生かされて行く生活がそのまゝ忍となるのである。さて阿彌陀とは之を翻譯して無量壽或は無量光と云ふ。無量壽とは其の壽命が限りなくゐらせらるゝのみならずその救に預る者も又限りなき壽命の得られることを表すものであり、又無量光とは其の光明に限りがないことを云ひ阿彌陀佛に無邊光佛、無礙光佛、無對光佛等の十二光佛の稱號があるのは此れに基くのである。無量壽經には無量壽佛の威神光明は最尊第一にして諸佛の光明のよく及ばざるところなり。

とか

斯の光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に、歡喜踊躍して

善心生ず。

とあつて何れも此の光明の偉大な力について述べたものである。今日の時局に際會しては軍陣に在る者も家庭にある者も心の落着を得ることが大切である。身は假令死生の巷に彷徨するとも心中にはいつも光風霽月、實に皎々と澄んだ月の様な落着が欲しいものである。即ち支那の言葉にもある様に「動中靜あり」の修養が必要である。家庭生活に於て今日物資は不足する。生活は益々逼迫して来る。氣分は愈々いらだたしくなる。此の時こそ佛教特に淨土門の教養が必要となつて来る。朝夕勤行の御念佛によつて自己の心の落着を得一日中すがすがしい氣持になつて生活を遂げて行く時は經文の如く身意柔軟とて不平不満も飛び散り歡喜踊躍とて喜んで日々の自己の職務に遇往することが出来る。自ら御奉公の道も全うされるものである。かくの如く如來の大慈大悲の御光に照されて明るく清く直く日常の生活を送ること、これが我々の家庭生活の眞義であり同時にそれこそ日本精神の本道でなくてはならない。此の如來と我々との關係について古來三縁と云ふことが云はれてゐる。親縁、近縁、増上縁これである。其の中親縁とは如來と我々との關係の極めて親密なことを云ふ。即ち我々が口常に如

來を稱すれば如來は即ち之を聞き、身常に如來を禮敬すれば如來即ち之を見、心常に如來を念すれば如來即ち之を知り、心常に如來を憶念すれば如來も亦我々を憶念し給ひ、是の如く我々の身口意は常に如來と離れず極めて親密の關係に在るが故に親縁と稱する。次に近縁とは如來念に應じて來現して我々と極めて隣近なるを云ふ。要するに三縁はか様に我々の心持に應じて如來が救済の御手を伸べられる事を説いたものである。然し人間凡夫の悲しさ。兎角油斷勝ちで今如來の御光に照されて人の本道に進みつゝも次の瞬間には既に之を忘れて妄念妄想に支配せられ易いのである。そこで善導大師は一心に専ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざる是を正定の業と名く。と仰せられ絶えず御念佛の生活を續けるやうお勧めになつてゐる。かくて御佛と共に生き共に勵む人生こそ淨土門の正しい信仰である。こゝに法然上人のいけば念佛の功つもあり、しなば淨土へまいりなん。とてもかくても、此の身には思ひわづらふ事ぞなきと思ねれば、死生共にわづらひなし。の御言葉が一層懷しく拜察される。

編輯後記

◇開戦と同時にわが無敵皇軍は有史以來の大戦果を次々とあげて世界を驚愕と尊敬の坩堝と化しました。

◇臺灣と云へば暑い所、樺太と云へば寒い所と思つてゐたのに、それとは較べものにならぬ酷暑酷寒の地に日夜御奮闘下さる皇軍將兵に捧げる感謝の言葉も知りません。しかしわれ／＼はこの感謝のしるしとして温暖の内地にあつて粉骨碎身御奉公の誠をつくしてゆくばかりです。

◇戦ひは未だ緒戦を終へたばかりです。世界の歴史を創るためこの先き幾年かの長期戦は覺悟の前です。何一つするにしても、長期戦に備へる心構へが必要です。

◇文祿三年堺の商人茶屋助右衛門が呂宋から歸つて三年目に、呂

宋からわが國に入貢し、更に四年たつて安南から入貢してゐます。丁度秀吉の末期に當ると云へば古いやうだが、今から三世紀半以前のこと、矢張りその頃東印度會社が設立された事を思へばさして大昔とは思へません。

◇東亞の盟主を以て任ずるからにはせまい内地にばかりゐたのでは仕方ありません。わが國の發展はわれ／＼の脚を以て實現させねばしようありません。

◇現代の國家總力戦では、誰れもかれもがそのもち場もち場にあつて直ちに御奉公が出来るといふ幸ひを深く感じなければなりません。われわれの一舉手一投足と云へどもお國のためでないものはありません。

◇吉田絃二郎先生から御多忙中を玉稿頂き感謝いたします。

◇「大東亞戦争と綴方教室」は澤山の學童諸君から作文を頂戴し

いづれも立派な出来ばえでした。中には大人が逆に叱られてゐるやうなものもあつて、さすが次代を背負ふ小國民であると感じさせられました。遺憾ながら紙面の關係で大部分を割愛するの止むなきに至りました。悪しからず。

◇増谷文雄氏の「先師を語る」は福田、道重、渡邊三師の分を一括めにして刊行する豫定です。これは本誌に發表したものを全部書き直し、大いに増補して傳記として立派なものになる筈で、目下同氏の手で脱稿を急いでゐます。

◇會員各位からいろ／＼貴重な御注意を頂き厚く御禮申します。出来るだけ御期待に副ふべく努めますから、何卒今後とも御聲援願ひます。

◇住所變更の際は前住所も御明記の上當方にお知らせ下さい。また雑誌不着その他御不審のことがありましたら御一報願ひます。

淨土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年一月二十日印刷納本
昭和七年二月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇

編輯兼 眞野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區板町七

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓二十錢

一ケ年 (送料共)

腦の病・神経系統諸症・神経痛
 腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治效能

腦神経系統諸病、神経病、腦神経衰弱、不眠症
 てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）腦
 梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
 逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
 神経性（耳病）、神経性（鼻病）、記憶力減退、
 思考力減退、精力減退、健忘症、性的神経病一
 切、神経性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
 鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
 胃腸障害、便秘症、神経痛、ロイマチス、關節
 炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥	
六日分	貳圓
十日分	參圓
廿日分	五圓
卅日分	七圓

全國有名藥店、一流百貨店ニアリ
 品切ノ節ハ直接本舖ヘ御注文下サ

試供藥と
 説明書を
 進呈

京都伏見いなり山
 謹製頒藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社丹平商會分店
 關東代理店 東京 株式會社丹平商會支店

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
 昭和十七年一月廿日印刷納本・昭和十七年二月一日發行

淨 土 第八卷第二號

（停）定價金十二錢（送料一錢）
 滿鮮臺等金十三錢
 外地定價